

NISHI - MAEYAMA TUMULUS

西 前 山 古 墳

——国補中小河川（藤沢川）改修事業地点——

1998年3月

長野市教育委員会

序

長野市において、平成10年2月7日から16日間の熱戦がくりひろげられた第18回オリンピック冬季競技大会と、3月5日から10日間にわたり感動のドラマを魅せてくれた第7回パラリンピック冬季競技大会も、数多くの人々のご協力により大成功のうちに閉幕することができました。

思い起こせば平成3年6月15日の開催都市決定以来、高速道路や新幹線の開通、オリンピック会場周辺の道路整備など、オリンピックに向けて空前絶後の開発ラッシュとなり、当市をとりまく環境も急激に変化いたしました。しかしながらこうした激変の片隅で、地中に埋もれている貴重な歴史である埋蔵文化財が、これら開発行為によって犠牲となっていることも忘れてはならないでしょう。私たちはその開発行為により失われてしまう埋蔵文化財の保護・保存・公開という大きな責務を担っております。

本書に所収しております西前山古墳は、歴史の町松代に所在する積石塚古墳です。この古墳は従来遺跡地図から漏れており、建設省が進めている藤沢川改修事業にともない新発見された遺跡であります。工事を担当された長野県長野建設事務所のご協力によりこの古墳の多くが現状保存されることとなりました。調査した規模は小さいものでしたが、その成果により長野市を代表する積石塚古墳の一つとなりました。ここに長野市の埋蔵文化財第90集として刊行いたします本書には、その成果が詳しく掲載されております。連綿と綴られてきた人々の歴史のほんの一部にすぎませんが、地域史解明の一助としてお役立ていただければこの上ない喜びであります。

最後になりましたが埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力ならびに発掘調査に際して多大なご尽力を賜りました建設省ならびに長野県長野建設事務所の皆様、古墳に該当する工区の施工を請け負われた有限会社新光建設工業の関係者、発掘作業に携わっていただきました地元発掘作業員の皆様、また報告書刊行に至るまでご支援・ご指導賜りました関係機関・諸氏に厚く御礼申し上げ、本書の上梓をもってご挨拶にかえさせていただきます。

平成10年3月

長野市教育委員会
教育長 滝澤忠男

例 言

- 1 本書は、長野県長野市松代町東条地区における「国補中小河川（藤沢川）改修事業」に伴い、平成9年度に発掘調査を実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、長野県長野建設事務所所長 青木忠雄と受託者 長野市長 塚田 佐との埋蔵文化財発掘調査委託契約書に基づき、長野市教育委員会（埋蔵文化財センター）が実施した。
- 3 発掘調査地籍は、長野県長野市松代町東条字西前山2323番地である。開発事業面積のうち埋蔵文化財の保護対象面積は600㎡で、そのうち約500㎡を発掘調査した。なお、古墳の墳丘斜面側は建設省所管であり、墳頂平坦部は民有地である。
- 4 本古墳は、上記開発事業に先立って実施した現地踏査によって発見された遺跡である。遺跡名称は字名を採用して「西前山古墳」とし、周知の埋蔵文化財包蔵地（長野市F-123）として登録した。
- 5 本書の編集は、矢口の指導のもと飯島が担当し、小野が補助した。執筆分担は文末に記した。
- 6 発掘調査の実施に際し、長野県長野建設事務所の諸氏には深いご理解とき絶大なご協力を賜った。また保護協議、現場および整理作業において下記の方々・機関より有益なご指導・ご助言をいただいた。
長野建設事務所関連事業課技師大澤和幸、長野県教育委員会事務局文化財保護課指導主事原 明芳・高田 実、土地所有者小林久子、明治大学文学部教授大塚初重・小林三郎、^{（財）}長野県埋蔵文化財センター小林秀夫・土屋 積・白居直之・青木一男・西山克己・廣田和穂、長野県立歴史館白沢勝彦（敬称略）
- 7 調査によって得られた諸資料は、長野市教育委員会埋蔵文化財センターで保管している。なお、出土遺物の注記記号は、「西前山古墳」と漢字で表記してある。
- 8 本書では、調査によって確認された遺構・遺物について、その基本的資料を提示することに主眼を置いた。資料掲載の要領は下記のとおりである。
 - 1 地図等に記載した方位は真北、実測図等に掲載した方位は全て座標北を表している。
 - 2 基準点測量および調査地・遺構等の測量は、平面直角座標系（国家座標）の第Ⅷ系の座標値と日本水準原点の標高を基準とし、「コーディック・システム」を援用するため株式会社写真測図研究所に委託した。
 - 3 墳丘の石積みの作図は、ラジコンヘリコプターによる空中写真測量とし、上記の業者へ委託した。
 - 4 墳頂部のトレンチ遺構測量は、基準点測量を基に開放トラバースを設定し、基本原図を作成した。
 - 5 遺物実測図は、土器類1：4、円筒埴輪1：4（1：3・1：6）、鉄製品・砥石・形象埴輪1：3、耳環・石鏃・古銭1：2、玉類1：1で提示した。
- 9 遺物写真の縮尺は任意であり、番号は実測図番号と一致する。
- 10 遺物実測図において、断面が白抜き（土師器）・黒塗り（須恵器）・粗アミ掛け（陶器）を表す。

目 次

序・例言・目次

第Ⅰ章 調査の経過	1
第1節 保護協議の経過	1
第2節 調査日誌抄	2
第3節 調査の体制	4
第4節 発掘調査の方法	4
第Ⅱ章 西前山古墳周辺の環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 皆神山周辺の古墳	8
1 発掘調査された古墳	8
2 皆神山周辺の古墳	10
第Ⅲ章 古墳の現状と清掃調査	13
第1節 古墳の清掃調査	13
第2節 古墳の現状と改変の状況	13
第3節 遺物採集状況	15
第Ⅳ章 墳裾部の調査	17
第1節 墳丘の構造	17
第2節 遺物出土状況	18
第Ⅴ章 墳頂部の調査	23
第1節 墳頂部破壊範囲確認調査	23
第2節 遺物の出土状況	27
第Ⅵ章 出土遺物	29
1 土師器	29
2 須恵器	32
3 装飾品	35
4 鉄製品	35
5 埴輪	36
6 その他の遺物	44
第Ⅶ章 ま と め	49

報告書抄録

奥付・長野市の埋蔵文化財第1～89集

挿 図 目 次

1 図	設計変更後の施工範囲図	2
2 図	調査区・トレンチ配置図	5
3 図	西前山古墳位置図	7
4 図	皆神山周辺古墳分布図	8
5 図	墳丘測量図(清掃調査後)	14
6 図	墳丘測量図(発掘調査後)	19
7 図	墳丘断面図	19
8 図	墳裾2区NEトレンチ北壁断面図	20
9 図	墳裾2区Eトレンチ東壁断面図	20
10 図	TWトレンチ平面側面実測図	20
11 図	墳裾1区平面実測図	21
12 図	墳裾2区平面実測図	21
13 図	墳裾3・4区平面実測図	22
14 図	墳丘トレンチ配置図	23
15 図	TEトレンチ・第1主体部平面、断面実測図	24
16 図	第1主体部立面断面実測図	25
17 図	TSトレンチ、第2主体部平面・断面・立面実測図	27
18 図	第2主体部遺物出土位置図	28
19 図	土師器・須恵器実測図	31
20 図	須恵器実測図	32
21 図	須恵器実測図	33
22 図	須恵器実測図	34
23 図	鉄・ガラス・土製品実測図	35
24 図	円筒埴輪実測図	37
25 図	形象埴輪実測図(1)	39
26 図	形象埴輪実測図(2)	40
27 図	その他の遺物実測図	44

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 保護協議の経過

藤沢川は豊栄の山中より皆神山東麓の扇状地を形成しながら千曲川へと流入する。皆神山西麓を流れる蛭川と合流し、下流域では天井川となることから付近の住民にとっては水害に悩まされる河川であった。そこで新たに藤沢川のバイパス部分を建設し、皆神山の北で蛭川と合流させる河川改修計画が浮上した。工事主体者である長野県長野建設事務所（関連事業課担当）との協議は平成6年10月13日より始まる。現河川拡幅部分については実質的に調査実施が不可能なため、バイパス部分について保護対象とする旨を確認した。平成7年5月25日に保護協議を行い、計画平面図等工事内容の詳細資料を請求した。平成8年10月16日に実施された長野県長野建設事務所・長野県教育委員会文化課（現文化財保護課）との定期協議の結果を受け、平成9年3月20日付8長建第外号「平成9年度国補中小河川改修事業（→藤沢川長野市松代に係わる埋蔵文化財発掘事前調査について（依頼）」が長野建設事務所より提出された。これにより4月2日に飯島と小野が現地踏査を実施した。現地踏査の結果は4月4日付9埋第6号「埋蔵文化財確認調査（現地踏査）の結果について（報告）」にて、開発予定地内に未確認の積石塚古墳らしき大きな石積みを1基発見したこと、これ以外の埋蔵文化財包蔵の可能性は低いことを報告する。これ以後「古墳状の石積み」が保護協議の対象となった。

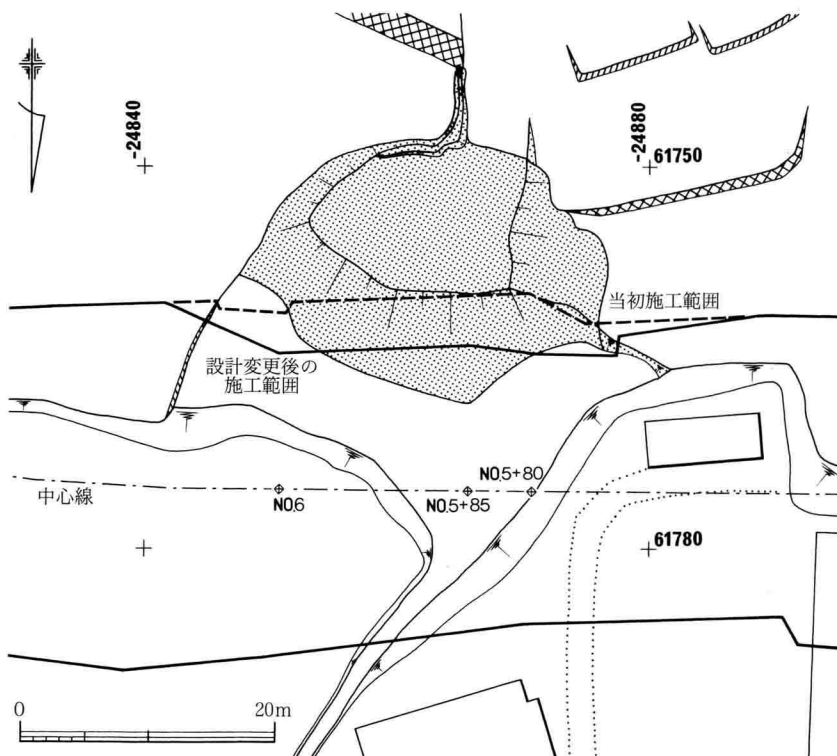
「古墳状の石積み」は発見当時、桐が林立し、下草に覆われ、歩くことでかろうじて石積みであることがわかる程に荒れていた。石積みの規模は東西約30m・南北約25m・高さ約5mと推定され、谷側斜面は段々の石垣状に、山側は平坦状に改変されていた。5月12日に具体的な保護措置について保護協議を実施した。協議における問題点の一つ目はこの「古墳状の石積み」が現段階では古墳か否か確定しえないことと確認調査も難しいことである。前述の理由から踏査での観察では限界があり、また古墳であれば簡単に重機を入れられる遺構ではないことが挙げられる。二つ目は保護対象の範囲である。「古墳状の石積み」の半分が事業区域に含まれ、残りの半分は民有地であることがネックとなった。通常、開発区域外であれば現状保存できるのであるが、古墳という一体の構築物、特に中心主体部には埋葬施設が予想され、横穴式石室であれば民有地側石積みの崩落の危険性もあるため、その保護協議には慎重な対応が必要となる。5月14日、民有地の所有者である小林久子氏を交えた協議により、まず開発区域内の発掘調査を実施し古墳か否かの確定をすること、民有地の桐の伐採など表面清掃調査を実施することを確認した。その後、起因工事施工により民有地側への影響が否めないことが確認できた段階で民有地側も発掘調査することを決めた。なお民有地側の調査分の費用についても、工事の影響が及ぶ範囲ということで開発事業者が負担することとなった。

7月17日付9長建第424号にて文化財保護法第57条の3第1項の規定により長野建設事務所長名で「埋蔵文化財発掘の通知」が提出され、同22日付9埋第85号にて長野県教育委員会教育長あてに進達する。この段階では「古墳状石積み」は周知の埋蔵文化財ではないので、般若寺遺跡の範囲内としている。長野県教育委員会教育長より8月22日付9教文第5-154号「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」にて発掘調査実施の回答があった。8月17日付9長建第423号「（→藤沢川改修工事の開発行為に伴う埋蔵文化財発掘調査について（依頼）」があり、8月25日付で「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を締結した。9月17日より発掘調査を開始することになった。発掘調査は工事工程との調整を図りながら、開発区域内である墳裾から開始した。墳裾に設定したトレンチから墳丘からの崩落石材とともに多量の円筒埴輪片が出土し、墳端である外護列石状石組みを確認

した段階で「古墳状の石積み」は積石塚古墳であること確認した。

10月8日、長野県教育委員会・長野建設事務所と古墳の保護措置について抜本的な保護協議を実施し、開発事業の設計変更や発掘調査の実施範囲等保護措置について話し合った。これにより建設事務所では管理道路を若干中心線に寄せ、古墳にかかる部分については自由勾配から擁壁処理へと設計変更を検討し、当初古墳の半分が削り取られる予定を墳端の一部に抑えることになった(第1図)。したがって古墳の多くは現状保存されることになる。文化財保護法第57条の6第1項の規定による10月20日付9長建第696号「遺跡発見の通知について」が長野建設事務所長名で文化庁長官あて提出され、10月24日付9埋第142号にて長野県教育委員会教育長あて進達した。表採遺物の示す古墳の時期が6世紀後半から末葉であることから主体部は横穴式石室である可能性が高く、民有地側石積みの崩落など工事による埋葬主体部への影響は否めないことが判明した。このため大幅に改変されている墳頂部の改変状況を確認することにし、その後適切な保護処理を施すことにした。これにともなう未施工部分である民有地側の発掘調査実施および調査費用の増加については、11月4日に担当者間で話し合い、12月15日付で「埋蔵文化財発掘調査変更委託契約」を締結した。

墳頂部発掘調査の結果、中心部で半壊の石室を確認し、さらに隣接して第2主体部も確認した。これら改変状況の調査後、工事施工による民有地側への影響のない範囲を確認した段階で現状保存を決め、第4節にて記述するように土嚢やシートによって保護しながら埋め戻し、12月12日現場における発掘調査を終了した。【飯島】



1図 設計変更後の施工範囲図 (1:600)

第2節 調査日誌抄

[1997(平成9)年]

- 4月2日 現地踏査にて「古墳状石積み」を発見。
- 9月17日 草刈りなど古墳表面清掃開始。
- 9月18日 伐採した樹木の除去、草刈り。
- 9月24日 墳頂部・西側斜面の石材露出作業。
- 9月25日 墳頂部・西～北側斜面の石材露出作業。
- 9月29日 墳頂部・北側斜面の石材露出作業。
- 9月30日 墳頂部・北～東側斜面の石材露出作業。



I-1 墳丘の清掃

10月1日 古墳全体および周辺の清掃作業。
 10月2日 清掃調査後の全体写真撮影。
 10月6日 墳裾トレンチ・調査区設定、掘削。
 10月7日 墳裾1・2区、Eトレンチ掘削。
 10月8日 墳裾1～4区、NWトレンチ掘削。
 10月9日 墳裾1・2区精査。写真撮影。
 10月13日～ 墳裾掘削。トレンチ・墳丘断面実測。
 10月15日 墳裾調査区・トレンチ掘削。
 10月16日 墳丘崩落土除去。石列の追求。
 10月17日 墳裾調査区・トレンチ掘削。写真撮影。
 10月20日～ 墳裾1～3区墳丘崩落土掘削。
 10月23日 墳裾トレンチ地山落ち込み状写真撮影。
 10月24日 後世石積み除去、墳丘中層の掘削。
 10月27日 作業休止。東条小4学年現場見学。
 10月28日 後世石積み除去、墳丘中層の掘削。
 10月29日 墳裾1～3区墳丘中層掘削。
 10月30日 墳丘4区後世石積み除去。
 10月31日 墳裾1・4区墳端確認後、現状測量。
 東条小5・6学年現場見学。
 11月4日 墳裾1・2・4区墳端確認。
 11月5日 墳裾1～3区第3段階掘削。
 11月6日 墳裾トレンチ精査。
 11月7日 墳裾および墳丘斜面・墳頂平坦部精査。
 11月10日 ラジコンヘリによる空中写真測量。
 11月11日 墳頂トレンチ設定、第1段階掘削。
 11月12日 墳頂トレンチ写真撮影。第2段階掘削。
 11月14日 第2段階掘削。排土ふるい作業。
 11月18日 第2段階掘削。TWトレンチ墳端確認。
 11月19日 TEトレンチ石室側壁検出。
 11月20日 墳頂トレンチ精査。写真撮影後、測量。
 11月21日 測量図結線後、実測メッシュ設定。
 11月27日～ 第1主体部（石室）実測作業。
 12月5日 全体の清掃作業後、ラジコンヘリによる2回目
 の空中撮影。
 12月11日 墳頂トレンチ保存措置、埋め戻し。
 12月12日 墳頂部全体埋め戻し。現地におけるすべての
 調査作業を終了する。

【小野】



I-2 墳裾1区の調査



I-3 TEトレンチの調査



I-4 排土のふるい作業



I-5 保存措置作業

第3節 調査の体制

本調査は、長野市教育委員会の直轄事業として長野市埋蔵文化財センターが実施し、その組織は以下のとおりである。

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	滝澤 忠男
調査機関	長野市埋蔵文化財センター	所 長	丸 田 修 三
		主幹兼所長補佐	小 林 重 夫
		所長補佐	矢 口 忠 良
庶務係	(係 長)	小 林 重 夫	
	事 務 員	青 木 厚 子	
調査係	(係 長)	矢 口 忠 良 (調査事業総括)	専門員 中 殿 章 子
	(主 査	青 木 和 明、社会教育課兼務)	専門員 山田美弥子 (調査員)
	主 査	千 野 浩	専門員 西 澤 真 弓
	主 事	飯 島 哲 也 (調査主任)	専門員 小野由美子 (調査員)
	主 事	風 間 栄 一	専門員 堀 内 健 次
	主 事	小 林 和 子	専門員 藤 田 隆 之
	専門主事	清 水 武	専門員 宮 川 明 美
			専門員 小林まゆ佳 (調査員)
整理担当者	飯島 (遺構写真、須恵器整理・実測)、山田 (土師器・鉄製品等整理・実測)、小野 (遺構写真、遺構図整理)。小林 (遺構図整理)、風間 (遺物写真、埴輪整理・実測・浄書)		
調 査 員	青木善子 (遺構・遺物図浄書)		
発掘参加者	飯沼美千代・上田 清・大島春江・太田千代美・倉島甲子男・近藤利子・坂口けい子・坂口延子・清水富士子・杉村寿枝・須坂万丈・関屋キヨ子・時澤富士子・永井百合子・中曽祢けさ子・中村一夫・堀内ます子		
整理参加者	岡沢治子・倉島敬子・多羅沢美恵子・徳成奈於子・鳥羽徳子・西尾千枝・向山純子・武藤信子		
測量業務委託	株式会社写真測図研究所代表取締役 杉本幸治 (長野市大字鶴賀678番地) 【小野】		

第4節 発掘調査の方法

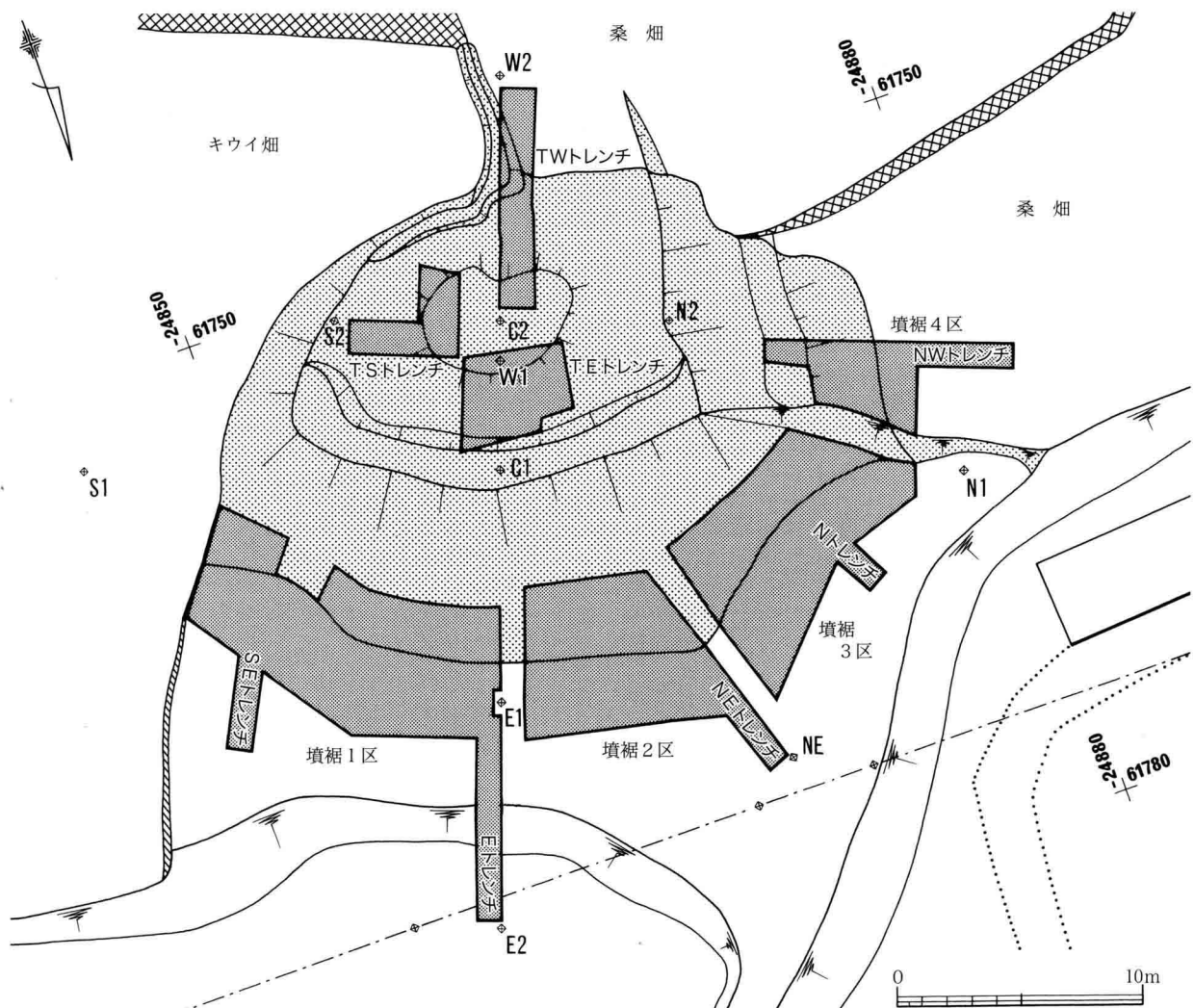
西前山古墳は、改変が著しいものの積石塚古墳である可能性がきわめて高い。おそらく地山層である土石混合材による大規模な整地作業の後、皆神山に産出する輝石安山岩の石塊のみを積み上げたタイプの古墳と考えられる。現在でも積石塚古墳の定義は定まっていないのが現状であるが、おおまかにいえば古墳墳丘の構築に際し土の代わりに拳大から人頭大の石を積み上げているものを指す。細分すれば土石混合墳丘や表面のみ石を積み上げる古墳もあり、また研究者によっては葺石も積石塚古墳の概念に含まれるとする説もある。他地域にもれず長野市域においても古墳の盗掘・破壊は著しく、半壊の積石塚古墳の表面に畑地耕作時に不要な石を捨て上げた場合、「ヤックラ」と呼ばれる石積みと肉眼のみによる識別は非常に困難である。積石塚古墳の実数は未だつかめておらず、本古墳のように未確認のものや全壊または埋没している積石塚古墳は相当数にのぼるものと思われる。し

たがって保護協議段階でも調査開始段階においても古墳か否かは断定できなかった。

このような状況の中で、本調査の第1目的は古墳か否かを確認することであった。この目的達成のため起因事業との調整を図りながら施工範囲にかかる墳裾部分から調査することになった。墳裾には古墳中心よりほぼ放射状に幅1mのトレンチを任意に5本設定し、北からNW・N・NE・E・SEトレンチと名付けた。また、墳端部確認を目的とした墳裾にかかる調査区を4区設定し、SEトレンチの南側を墳裾1区、SE～Eトレンチ間を墳裾2区、E～NEトレンチ間を墳裾3区、NE～N～NWトレンチ間を墳裾4区とした(2図)。

積石塚古墳の発掘調査においては、墳丘の掘削とは石を除去することになる。石と石との前後関係が土壌の堆積状況とは異なり現場にて判断することが難しい。実際には流入土によって区別するしか方法はないのだが、場所によっては流入土が少なく古墳の石を後世に積み変えていることを証明するデータが得にくい。実はこのことが古墳の墳端確認にも大きく影響してしまった。

古墳であることを確認した後、保護協議を経て民有地側墳頂部の破壊範囲を確認する調査に入った。石室構築材と思われる大型石材が散乱するなど改変が著しいことと墳頂部に石室があって昔の所有者が削平したという古老の話により、埋葬主体部が破壊を受けていることが予想できたからである。この状況によっては起因事業施工の際に石積みのバランスが崩れて民有地側が崩落するという危険性も考えられたため、開発事業者側も土地所有



2図 調査区・トレンチ配置図 (1:300)

者も理解を示し、事業者側の費用負担で調査した。墳頂平坦部は清掃調査の結果石材が剥出しで散乱しており、作業の安全確保のため全面発掘は行わずトレンチ状の調査区を設定する方法を選択した。墳頂平坦部中心より西側の皆神山側に古墳の範囲確定を目的としたTWトレンチを、南側に散乱する大型石材の性格確認のためのTSトレンチを、また古墳のほぼ中心となる東側には埋葬主体部検出を目的としたTEトレンチを設定した。

墳頂平坦部のトレンチ調査においては、玉類等小さな遺物の出土が予想されたため、各トレンチとも排土を層位別に取上げ、それを粗目・細目・極細目の3段階のふるいにかけた。ふるい作業では鉄製品の破片や土玉が発見された。

墳裾出土の遺物はほとんどが黒褐色崩落土からの出土である。円筒埴輪が主体であるが、前記の調査区別および層位別に一括して取り上げた。また鉄鏃などの鉄製品は出土位置を記録した。墳頂平坦部の遺物については、基本的に改変を受けた部分までの調査のため、また流入土が僅少なことも手伝って層位を判断することが困難であった。土器片・埴輪片はトレンチおよび小単位ごとに一括して、その他の遺物は位置と高さを記録し取り上げた。TSトレンチの石室床面状遺構から出土した遺物は、本来なら出土状況を作図するのが通例ではあるが、流入土がきわめて少なく石と石の隙間があるため、下に落ち込んでしまう危険性が高く、緊急的に写真撮影のみとし実測は実施できなかった。

墳丘測量図はラジコンヘリコプターによる空中写真測量とした。また、墳裾・墳頂のトレンチ位置やTWトレンチ内、さらに遺物出土位置などはコーデックシステムを援用し、指定した測点を測量し、プロットアウトした1/20縮尺の点原図を現場にて図面化した。墳頂平坦部のTS・TEトレンチ内は基準点を基に開放トラバースを組み、手作業で1/10縮尺の実測を行った。

墳頂平坦部は現状保存のため、TE・TS・TWの各トレンチとも保存措置を講じた。まず第1段階として最終確認面の石材を保護する目的でふるい作業後の排土入りの土嚢を一定レベルにまで敷き詰めた。これにより石室の構築石材が動かないようにしてある。第2段階としてブルーシートを敷いて埋め戻しの石材と最終確認面の石材が判別できるようにした。第3段階として墳頂部および墳端部にて不要となった石材のうち比較的小型（拳大程度）の石材を用いて敷き詰めた。第4段階として墳頂部および墳端部にて不要となった石材のうち比較的大型の石材（墳丘表面と同規模の人頭大程度）を用いて調査前のレベルまで積み上げた。第5段階としてさらに墳頂平坦部全体をもう1層分同一の石材にて敷き詰め、古墳の範囲が明確になるよう保護してある。【飯島】



I-6 土嚢による石室保護（第1段階）



I-7 小型石材の充填（第3段階）

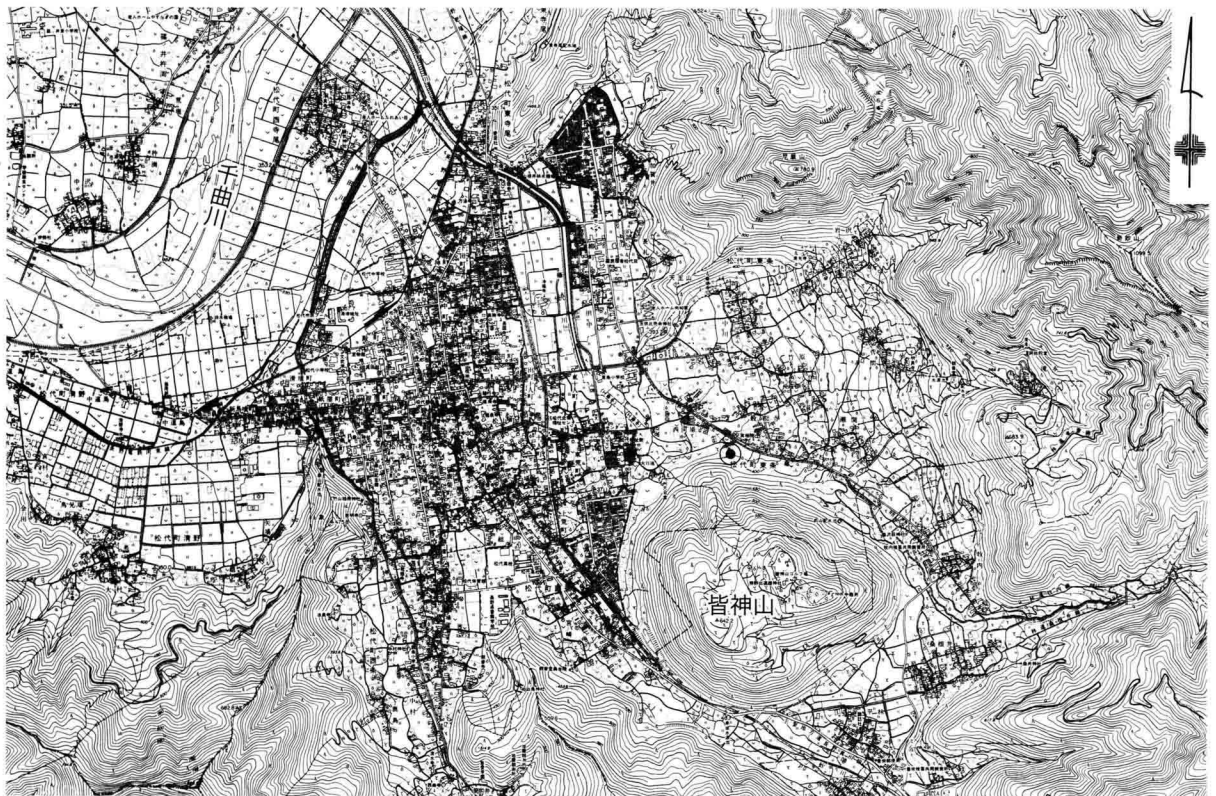
第Ⅱ章 西前山古墳周辺の環境

第1節 地理的環境（3図）

長野県の県庁所在地である長野市は県の北部にあり、総面積404.35km²・人口約36万人の地方中核都市である。地形および地質的には、中央部の長野盆地平野部にあたる通称善光寺平と西側の西部山地（通称西山）、東側の東部山地（河東山地）に大別されている。東部山地を形成する新第三系は西部山地よりも古く、その年代は約1000万～200万年前と推定されている。中央部の善光寺平は長野市を中心に南西から北東の長軸をもつ狭長な盆地で、長さ約40km・最大幅約10km・標高330～360mである。第四紀中ごろに形成された内陸盆地で、周辺山地から流入する中小河川の扇状地堆積物や千曲川・犀川の氾濫原堆積物によって成り立っている。

西前山古墳の所在する長野市松代町は、背後に母袋山（標高977.5m）・高遠山（標高1208m）・奇妙山（標高1529.1m）などの東部山地を控え、神田川・蛭川・藤沢川によって形成された合流複合扇状地の扇端部に位置している（3図）。扇端部は非常に緩やかな傾斜で、上記の3河川は天井川となり千曲川氾濫原に接している。現在の千曲川は松代市街地から離れているが、これは1742（寛保2）年のいわゆる「戌の満水」により松代城内が浸水したことから、1752（宝暦2）年に松代城から西へ約1km遠ざけて開削して蛇行を少なくしたものである。

松代の市街地の南側にはM字形の美しい曲線をもつ独立山塊である皆神山がそびえ立っている。この皆神山は標高659mの溶岩ドームで、頂径600m・底径1.2kmの切頭円錐形を呈し、見かけの比高は約250mである。北西山麓にある大日堂で行われたボーリング調査の結果によると、ドーム溶岩は地下150m付近まで存在し、さらに下位には厚さ14mの湖沼堆積物をはさんで中新世中期の黒色頁岩層（別所層）があるという。岩石は角閃石を含有す



3図 西前山古墳位置図（1:20,000）

る普通輝石紫蘇輝石安山岩で、見た目は赤っぽく比較的脆弱である。皆神山の溶岩ドームは、カリウム－アルゴン年代から0.35Ma（35万年前）と測定されている。西前山古墳はこの皆神山の北側山麓に位置し、墳丘に用いられていた岩石はこの皆神山の輝石安山岩である。

【飯島】

〔引用・参考文献〕

和田 博 1993 「松原遺跡周辺の環境」『松原遺跡』長野市の埋蔵文化財第40集 長野市教育委員会
長野市誌編さん委員会 1997 『長野市誌』第1巻 自然編 長野市

第2節 皆神山周辺の古墳（5図）

1 発掘調査された古墳

松代地域の遺跡の中で、発掘調査された古墳を取り上げて概観する。

参考 北平1号墳〔県埋文1996〕1991（平成3）年に上信越自動車道建設の際の土取り場として財団法人長野県埋蔵文化財センター（以下、県埋文）により発掘調査された古墳である。尼飾山系から北行する尾根支脈の



4 図 皆神山周辺古墳分布図（1:10,000）

頂部に位置し、松原遺跡のある千曲川沖積地との比高差は150mある。主軸長14mを測る前方部が未発達な前方後方形墳丘墓で単独墓である。埋葬主体としては2基の石槨状石積みが発出され、小口痕から箱形の木棺が想定されている。土器は棺内に落ち込むような状況で出土し、東海系のひさご壺が在地櫛描文系土器（御屋敷段階）と伴っていた。また墓壙構築面からは数点のガラス小玉が出土している。3世紀後半に比定している。

参考 土口將軍塚古墳 [長野市・更埴市教委1987] 古墳の盗掘を契機として長野市と更埴市の両教育委員会により、1982（昭和57）年からの5年間に重要遺跡確認緊急調査事業として発掘調査が実施された前方後円墳である。妻女山から西方へ突出する薬師山の標高450m付近に立地し、沖積面との比高差は約100mである。全長67.7m・後円部径40.5m・前方部幅30.5mを測る2段築成の前方後円墳である。葺石を貼り、川西編年Ⅲ期に相当する円筒・朝顔形埴輪を巡らせている。また埴輪の中には平行状・格子状のタタキ痕跡やヘラ状工具による線刻をもつものがある。後円部中央に主軸平行して2基の竪穴式石室が構築されている。大半は盗掘による破壊を受けているが、同時構築の2基併葬例とみられている。石室内からは鉄鏃26本と三角板革綴短甲片数枚が出土し、後円部墳頂からは高杯を中心とする土師器が約40個体出土している。5世紀初頭～前半の築造時期が考えられる。1973（昭和48）年長野県史跡に指定された。

2・3 舞鶴山1・2号古墳 [県史1982] 1952（昭和27）年に米山一政氏が石室清掃調査を実施し、1976（昭和51）年に東京教育大学によって墳丘測量および石室清掃調査された古墳である。1号古墳は標高514.5mの舞鶴山山頂にある直径32.7m・高さ5.5mを測る2段築成の大型円墳で、墳頂および段築付近から少量の埴輪片が出土している。墳頂平坦面には全長5.3m・幅70cmの割石小口積みした竪穴式石室と木棺直葬と思われる全長3.6m・幅90cmの掘り込みを検出している。掘り込みからは珠文鏡1面が出土している。2号古墳は1号古墳より距離にして約30m・約8m下位の山頂北西縁に築造され、全長36.5m・後円部径19m・同高さ3m・前方部幅18mを測る前方後円墳である。主体部は竪穴式石室で全長5.3m・幅70cmを測る。大型円墳が山頂で前方後円墳が下位という古墳立地に特徴があり、築造年代は1号古墳が5世紀後半、2号古墳を5世紀後半～6世紀初頭に比定されている。1978（昭和53）年長野市史跡に指定された。

4 長礼山2号古墳 [長野市教委1981] 1974（昭和49）年に採石業者からの通報により発見された古墳で、急遽長野市教育委員会が2号古墳を緊急発掘調査している。直径20mの盛土墳で竪穴式石室と考えられる1号古墳と古墳か否か不明な3号古墳は現状保存されている。急峻な尼飾山の南西尾根の緩斜面、標高395m付近の山腹に築造されており、水田域との比高差は約40mである。直径16.6mの円墳で一見積石塚を思わせる葺石で覆われている。円筒・朝顔形埴輪は墳丘全面から出土しているが、墳頂部墓壙付近からは人形・動物・水鳥・堅魚木のある家形・盾形などの形象埴輪も出土している。円筒埴輪は外面調整はタテハケの後B d種ヨコハケで甕窯焼成と考えられることから川西編年Ⅳ期に相当する資料である。埋葬主体部は全長5.15m・幅4.2mの隅丸形状墓壙の中に組合式箱形石棺が構築されている。全長1.9m・幅45～58cm・床面までの深さ約40cmを測り、等高線に対し平行に主軸をもつ。扁平で大きい天井石2枚の裏側は赤色塗彩されていた。石棺内からは金製釧2個と鉄鏃1点が発出している。築造年代は5世紀後半に求められている。

参考 大室古墳群 奇妙山系から北東にのびる3支脈の尾根上やその山麓斜面に約500基が密集する古墳群である。現在は地形的に北山・大室谷・霞城・北谷・金井山の5つの支群に分けられ、約330基が積石塚古墳、いわゆる合掌形石室は40基ほどが知られている。この古墳群に関する本格的な研究は、1945（昭和10）年以降の栗林紀道氏による分布調査に始まる。以来農業大学建設にともなう緊急発掘調査や明治大学による学術発掘調査が実施され、一部が1997（平成9）年国史跡に指定された。そのほとんどが盗掘を受けているものの約500基のうち約30基が調査され、多くが横穴式石室を主体部にもつ後期古墳であることや、石積み墳丘と合掌形天井を有する埋

葬主体部がセットとなる古墳は5世紀の中ごろまで遡る可能性をもつことがわかってきた。当センターが1993（平成5）年に林道鳥打峠線改良事業にともない発掘調査した金井山支群第466号古墳（27）は、小さな尾根上の突端部に位置し、近世鳥打峠開削にともない半壊状態となつたらしく、墳丘は古墳の形状をとどめない。おそらく土石混合の盛土に外表面を角礫で被覆した石積み墳丘の古墳と考えられる。横穴式石室は左側壁の平石状の基底石のみ残存し、玄室内は縦積み、羨道部は横積みである。石室内からの出土遺物には7世紀末から8世紀初頭にかけての土師器・須恵器の土器類や勾玉1個・切子玉2個・管玉2個・多数の白玉や小玉装飾品、馬具の飾金具、鉄製品などがある〔長野市教委1994〕。

参考 松原1号古墳〔県埋文1992〕 1991（平成3）年に上信越自動車道のトンネル入口部にて県埋文により発掘調査された後期の円墳である。北平1号墳のある尾根支脈からさらに北西にのびる金井山山麓の西側急斜面、標高360m付近に位置し、調査区外にもう1基存在するらしい。急斜面のため墳丘盛土と横穴式石室の天井石と羨道部を流失していた。山側斜面を切土して平坦面を造成し、直径約13mの外護列石を配置している。列石は2重で、さらに石室につながる内廻石列が構築されている。現存する石室玄室の規模は全長3.9m・最大幅2mでやや胴張り傾向である。床面は拳大の角礫を敷いてあり、下部には石組みの排水溝が設置されている。石室床面から金環・銀環・勾玉・管玉・ガラス小玉・直刀・轡・鉄鏃などの遺物とともに7体分の人骨も発見された。墳丘裾部からは須恵器の大甕、土師器の高杯が出土している。

2 皆神山周辺の古墳

従来の遺跡分布地図（埋蔵文化財包蔵図）は皆神山周辺の古墳の位置が正確ではなく、「古墳群」として線で囲まれていただけであった。そこで今回はできるだけ実際の足で確かめた古墳の位置を基に、各古墳をまとめてみた。もちろん「古墳群」の用語は慎重を期すべきではあるが、その前段階としての現状認識が不明確である以上、将来的な群構造の把握に向けての一作業とご理解されたい。しかしながら長野市の「遺跡台帳」や長野県史の「遺跡地名表」〔県史1981〕との対比は、情報不足から困難を極め今後の作業とした。

5 皆神山北麓古墳群 この古墳群名は今回の仮の用語である。屋地古墳群4基と今回新発見した西前山古墳の計5基をもって形成するが、今後新たに発見される可能性もある。

6 東条古墳群〔県史1982〕 奇妙山と尼飾山の山麓および松代町東条の西向き斜面に所在する古墳を範囲とする。「遺跡地名表」の菅間王塚古墳・菅間1～4号古墳・竹原笹塚古墳・下岩沢古墳・熊の沢古墳・瀬関古墳・寄塚古墳の計10基を構成古墳とする。**菅間王塚古墳**(4)は長野県最大規模を誇る直径34m・高さ6.7mの、石塊のみで積み上げられた積石塚古墳である。内部主体は正式な調査を経ず、また情報も交錯しており不明としかいえない。隣接して山手側にはほぼ同規模の古墳が1基ある。1965（昭和40）年に長野県史跡に指定された。1967（昭和42）年に長野市史跡に指定された**竹原笹塚古墳**(5)は、直径26m・高さ3.6mの積石塚状円墳である。おそらく西前山古墳と同様な墳丘構造をもつものと推測できる。内部主体は合掌形天井の横穴式石室で、石室長6.8m・最大幅2mの合掌形天井を有する石室としては大型である。伝出土遺物として轡1個・雲珠1個・鉸具2個の馬具や鉄鏃が知られており〔松尾1987〕、これらから6世紀中頃の年代観が推測されている。

7 牧内古墳群〔米山1978〕 牧内の集落内にある古墳群で、「遺跡地名表」の1・2号古墳と桐塚古墳を範囲とする。**牧内1号古墳**(7)は青山悦男氏の畑地内にある直径13m・高さ3.5mの積石塚状円墳で、横穴式石室が南に開口している。石室は全長6.6m・幅1.75m・高さ2.2mを測る狭長な短冊形であり、石室内の天井は奥壁側が一段低くなっている。出土遺物には金環・勾玉・雲珠・鉄鏃の記載があるが行方不明である。2号古墳は直径14.3m・高さ4.2mの円墳とのみ記されており、具体的な位置や内容は不明である。桐塚地籍には古墳状の高まりが2基

確認できた。どちらかが「牧内2号古墳」の可能性もあり確定できないが、一応合計4基とした。

8 桑根井鎧塚古墳群 松代町豊栄の桑根井集落のある扇状地上畑地内の古墳を範囲とし、牧内古墳群とは藤沢川で、次の平林古墳群とは地形的に分けられる。「遺跡台帳」の桑根井空塚古墳・久保古墳・前山古墳・鎧塚1～7号古墳・観音塚古墳を含む計13基で構成する。なお村北地籍にあるとされる2基についても平林集落内よりは皆神山麓の方が可能性が高いことから構成古墳とした。桑根井空塚古墳(9)は1965(昭和40)年に長野県史跡に指定された古墳で、現在は墓地として利用されているため原形を損ねているが直径17m・高さ3.4mの積石塚円墳である。合掌形天井の横穴式石室が南に開口しており、全長6.1m・玄室長4.2m・幅1.5mの長方形で、竹原笹塚古墳より小さい。1924(大正13)年に瑪瑙製勾玉1個・碧玉製管玉1個・糸切り底の須恵器1個の出土を『松代町史』[松代町役場1929]は伝えるが行方不明である。桑根井鎧塚1～7号古墳(10)は1996(平成8)年に長野南農協による宅地造成事業にともない当センターが発掘調査した古墳群である。開発予定地内には古墳5基とヤックラ6基が存在したが、保護協議の結果保存状態の良い3基は公園内に取り込んで現状保存することになり、このうち第1期造成分として仮4号古墳の全面発掘調査と仮1号古墳の保存にともなう破壊範囲の確認調査を実施した。全壊の仮5号古墳は石室構築材が散乱する程度の痕跡のみで、外護列石などの検出も不可能であった。仮4号古墳は全壊寸前の横穴式石室で、側壁基底石の一部が残存していたにすぎない。直径8m前後の円墳と推定する。仮1号古墳でも横穴式石室の入口を確認し、外護列石・内廻り石垣列を検出した。直径15m・現存高2mの積石塚古墳で、墳丘内部は土石混合である。両古墳とも出土遺物は7世紀末から8世紀初頭の土師器・須恵器の土器類のみで埴輪や鉄製品などは出土していない。現状保存する仮1号古墳は土嚢・保護シートなどによって埋め戻し、積石墳丘を良質土と芝で覆い公園内の築山として保存してある[長野市教委1997]。観音塚古墳(11)は『更級埴科地方誌』で紹介されている古墳で、皆神山南麓の扇状地上に位置していたが、現在は完全に削平され痕跡すらとどめない。直径18mの積石塚古墳とされている。当時の土地所有者柳沢伝治氏により1875(明治8)年に発掘され、六鈴鏡1面・勾玉8個・切子玉3個・耳環9個・丸玉7個・ガラス小玉20個・鉄鐺1個・鉄鏃12本・雲珠1個・辻金具3個・轆1個・甲冑破片数点などが出土したらしいが、一部散逸し一部が東京国立博物館にあるらしい。

9 平林古墳群 [米山1978] 桑根井鎧塚古墳群よりは蛭川よりで1段低くなっており、虫歌宮崎古墳群とは蛭川で分けられる。村東1・2号古墳、村西1・2号古墳を範囲とする。『更級埴科地方誌』にある村西墓地区内古墳は1・2号のうちのどちらかと思われる。現在は墓地となっており、若干の高まり程度しか確認できないが、直径13.7m・高さ2.1mの積石塚で、石室は長さ2.4m・幅1.17m・高さ60cm、四壁は平石を立てて構成しており大室古墳群にみられるような竪穴式と記述されている。

10 南大平古墳 [米山1978] 同じく『更級埴科地方誌』で紹介されている古墳で、「遺跡地名表」では3基の内3号古墳とされている。1・2号古墳の立地は山麓となっているので、おそらく村北地籍の古墳となり、地形的にも南大平地籍は単独墳となる可能性が高い。皆神山南側の標高530m付近の山腹に位置する直径18m・高さ6.2mの盛土墳で、南側斜面に開口する両袖式の横穴式石室をもつ。石室は全長7.7m・玄室長3.94m・奥壁幅2m・玄室の高さ2.25mを測る平面長方形を呈している。古くから開口しており遺物は不明であるが、現在は皆神山の岩戸神社として祀られている。

11 虫歌宮崎古墳群 南は中条遺跡と同じ範囲となり『更級埴科地方誌』の梅の宮古墳(梅の観音塚)を含み、北は関屋川西の9基を範囲とする古墳群である。一帯には20基以上の小円墳が存在したと伝えられるが、圃場整備の影響もあって現在は数基しか残っていない。宮崎古墳(15)は1983(昭和58)年に宅地造成事業にともない長野市教育委員会が発掘調査した古墳である。主体部は全壊寸前の横穴式石室で、出土遺物には直刀・刀子・鉄鏃・

辻金具・鞍金具・丸玉・ガラス小玉などがある。

12 小丸山古墳 [米山1978] 『更級埴科地方誌』で紹介されている単独の古墳で、皆神山山頂の標高560m付近に位置している。直径30m・高さ4.6mの盛土墳で、周溝を巡らせている。明治年代に発掘され、竪穴式石室と推測されている。円筒埴輪の出土があったらしいが、情報未確認で詳細は不明である。

【飯島】

〔主要引用・参考文献〕

長野県史刊行会 1981 『長野県史』考古資料編 全一卷(一) 遺跡地名表

長野県史刊行会 1982 『長野県史』考古資料編 全一卷(二) 主要遺跡(北信・東信)

長野県史刊行会 1988 『長野県史』考古資料編 全一卷(四) 遺構・遺物

勲長野県埋蔵文化財センター 1992 「松原遺跡」『長野県埋蔵文化財センター年報3』

勲長野県埋蔵文化財センター 1996 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』7—長野市内その1—

松代町役場 1929 『松代町史』上巻 (株臨川書店 1986年復刻)

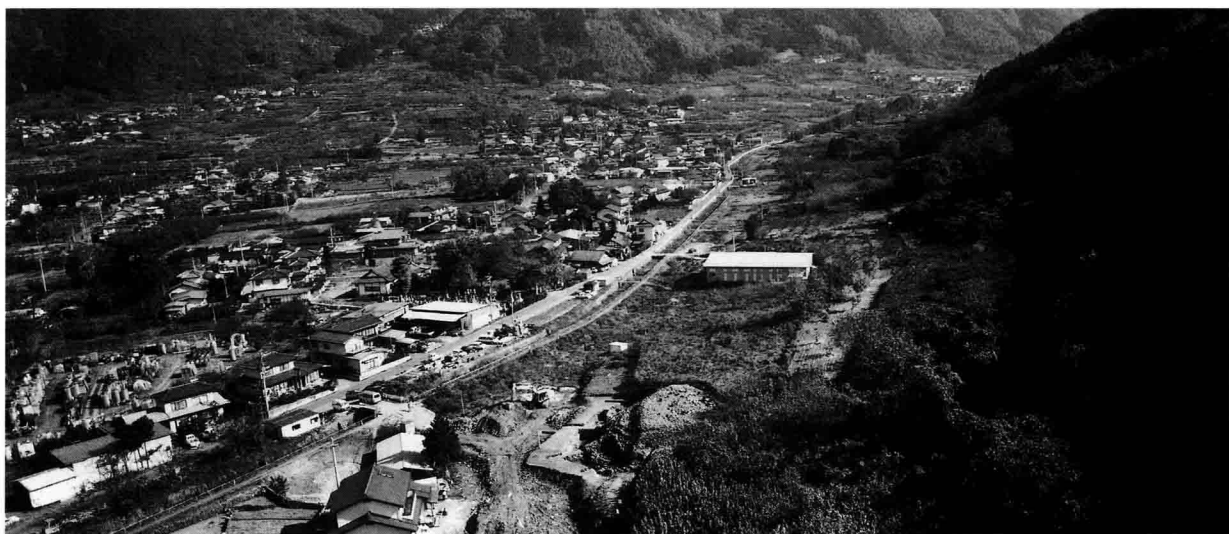
米山一政 1978 「第1章 古墳時代 —古墳」『更級埴科地方誌』更級埴科地方誌刊行会

長野市教育委員会 1981 『湯谷古墳群・長礼山古墳群・駒沢新町遺跡』

長野市教育委員会・更埴市教育委員会 1987 『土口將軍塚古墳』



Ⅱ－1 松代町遠景(千曲川より、中央のM字形の山が皆神山)



Ⅱ－2 西前山古墳と東条古墳群を望む

第Ⅲ章 古墳の現状と清掃調査

第1節 古墳の清掃調査

平成9年4月2日に国補中小河川（藤沢川）改修事業予定地を現地踏査した際、西前山古墳を発見した。

発掘調査の実施に先立ち、西前山古墳が含まれる工区の施工請負業者に桐等の樹木の伐採を依頼した。伐採にあたっては積石の移動など古墳を痛めないように注意をうながした。

平成9年9月17日から10月2日まで、古墳墳丘の石積みを露出させるための清掃調査を実施した。前述したとおり開発予定区域は古墳の北半分であり、南側半分は民有地である。所有者より桐等の樹木の伐採と草刈りの許可をいただき、古墳全体を調査範囲とすることができた。

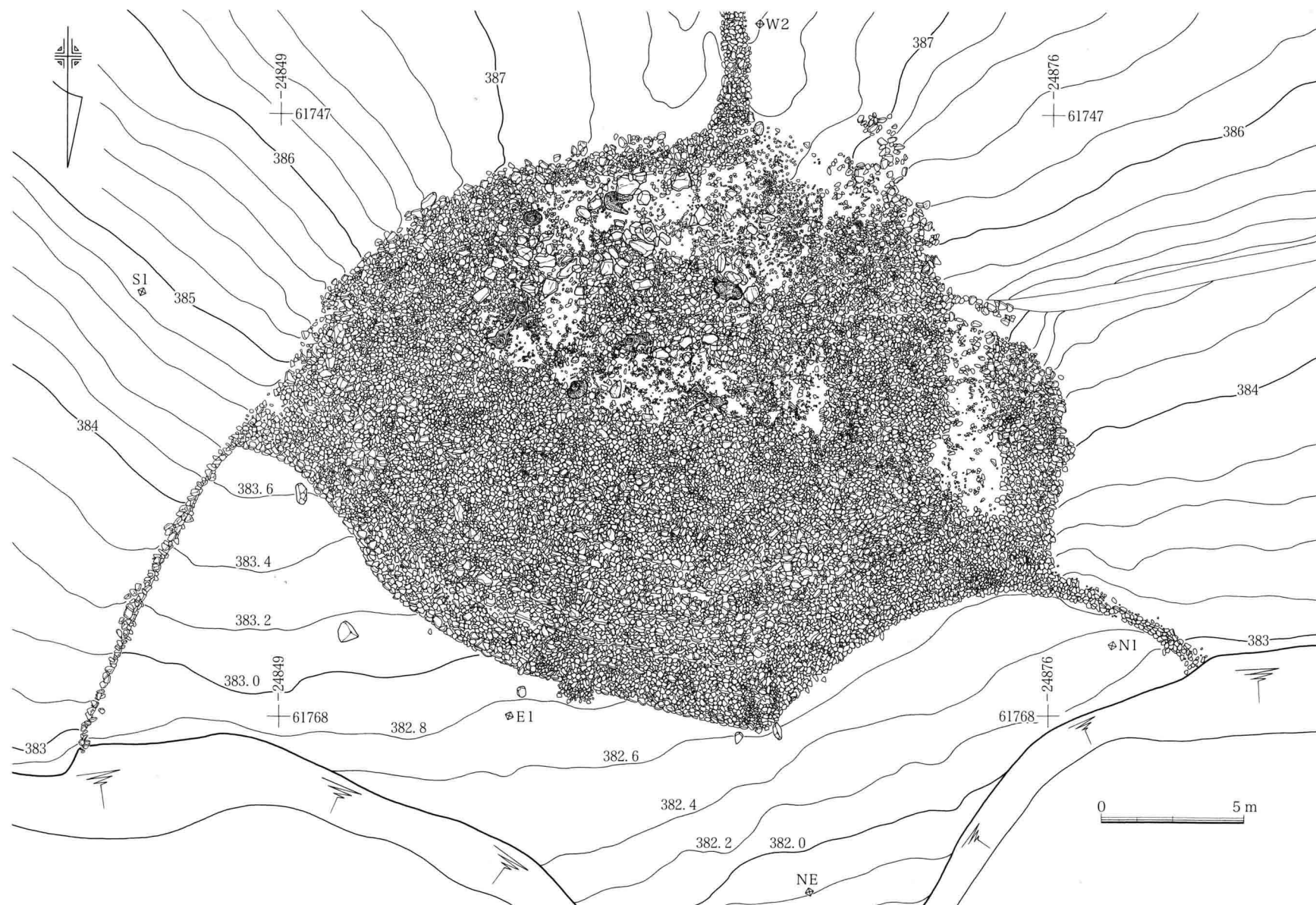
まず、伐採した樹木を搬出し、下草刈り作業を行った。一時期桑畑として地目利用されていたらしく、その痕跡の根も残存しており、石を動かさないように切断した。次に、捨てられていたゴミと堆積した腐葉土を除去した。この時点から埴輪片等の遺物が出土するようになり、古墳である可能性が高まるとともに大幅な墳丘改変が予想された。さらに次の段階として墳丘表面の石積みを露出させるために、石と石の間に流入した土砂を取り除く作業を実施した。この流入土の状況や量は場所によってまちまちだが、基本的には石を動かさないで、石と石の間の土砂をすくい上げるようにした。

【飯島】

第2節 古墳の現状と改変の状況

墳丘清掃調査の結果、現状での石積みの規模と形態が明らかとなった（5図）。東西29.1m・南北20.7mを測る不整な楕円形を呈し、それぞれ畑地境の石垣列に接続し平面形は歪んでいる。高さは石積みの南側（山側）裾からはほぼ水平で高さはなく、石積みの北側裾のテラスからは4.67m、さらに下段の藤沢川に隣接するテラスからは6.70mを測る。皆神山北麓の斜面（約10～15°）に構築されているため、印象としては「石の山」というよりは「石でつくったテラス」である。墳頂部はほぼ平坦で東西約16m・南北約10mの広さをもつ。北側斜面への縁には堤状の石積み列があり、高さは50cm程である。中心部は石材が密集しており、若干高くなっているがその周縁部は土砂の流入が多い。中心部および東側では一抱え大程の大型の石材が混じっている。この墳頂平坦部は南（山）側の裾へと続いているため、南側には墳丘斜面は存在しない。東側の墳丘斜面は南から北に向かって傾斜の幅が大きくなり、西側斜面は大きく2段に分けられていた。北側の墳丘斜面は約30°の傾斜となっている。階段状に5～6段の石垣がつくられ、それぞれの平坦部には桑の根が残っていた。この石垣は北側斜面でも西半分に残存しており、東半分は崩落が著しくまた傾斜もきつい。

発掘調査実施中に地元の方から本古墳にまつわる伝聞をうかがった。それによると「墳頂平坦部に石の部屋（おそらく石室であろう）があり、その天井が屋根形になっていた。その後、昔の地権者が石の部屋を崩して盛り上っていた石を平らにして桐の木を植えた」とのことである。これらの情報から改変の推移を考えると、五輪塔や北宋銭などの中世遺物の出土がみられることから、中世段階での何らかの意図をもった利用改変が考えられる。近代には桑畑になり、効率的な栽培のために北側墳丘を段々状に改変し、栽培可耕面積を増やしたものと推定される。また、墳頂部の平坦化するかわり石室の破壊行為の時期については、桑畑になっていた時期との前後関係は不明である。また、屋根形天井の石の部屋、いわゆる合掌形石室の可能性については発掘調査の結果否定せざる



5 図 墳丘測量図 (清掃調査後 1:200)

をえない。中心主体部は大きく改変を受けているものの側壁の積石状態から横穴式石室である可能性が高く、他の類例からみてもその構築技法からは合掌形天井は架構しえないものと考えられる。おそらく近在の竹原笹塚古墳の合掌形天井を有する石室と混同しているものと思われる。しかしながら、後付けの横穴式石室と予想した石室床面状遺構が合掌形天井であった可能性や、今回の調査で確認できなかった下層に合掌形天井を有する埋葬施設が存在する可能性も、僅少とはいえ残されていることを付記しておきたい。【飯島】

第3節 遺物の採集状況

清掃調査時に墳頂部を中心に遺物が表面採集されている。その多くは石と石の間に落ち込んでいたものであり、種類は埴輪・須恵器・土師器・鉄鏃・その他鉄製品・五輪塔・骨片などである。このうち、墳頂部では土器片がもっとも多く、鉄製品も採集できたが、埴輪片の採集量は少ない。出土位置も一定のまとまりは認められるものの、位置・種類ともに散乱状態にあり主体部の大幅な改変が容易に推測できた。北側（川側）斜面では埴輪片の採集がほとんどであるが出土量は多くはない。鉄製品の中には近年の所産と思われる鎌の刃と用途不明の鉄板片がある。また骨片は牛の足と考えられるもので、解体・投棄された残滓と思われる。【飯島】



Ⅲ－１ 調査前の西前山古墳遠景（北より）



Ⅲ－２ 伐採・草刈り後の西前山古墳遠景（北より）



Ⅲ－３ 清掃調査後の古墳全景（北より）



Ⅲ－４ 古墳近景（東より）



Ⅲ－５ 北西側墳丘斜面(西より)

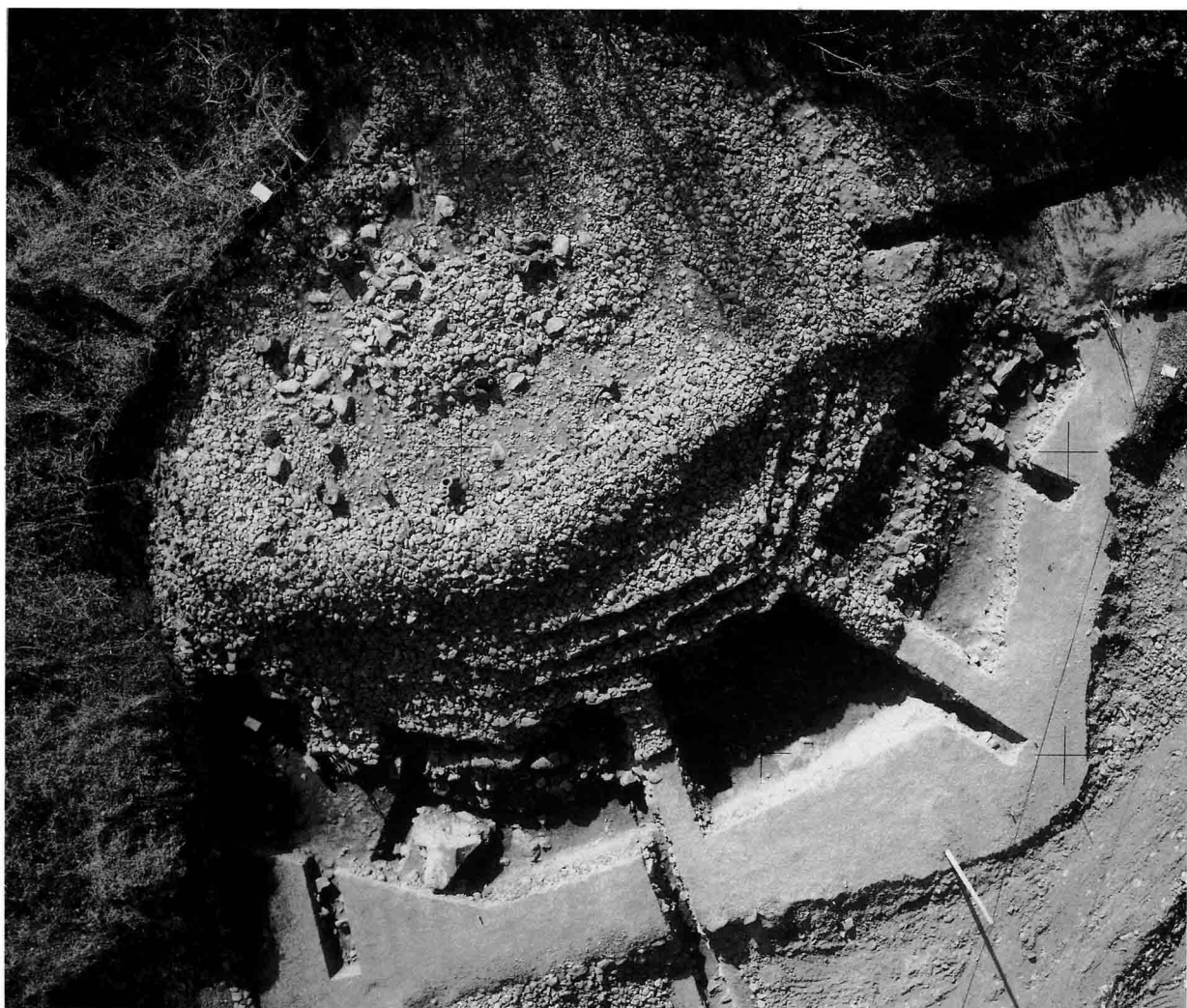


Ⅲ－６ 西側墳丘斜面（西より）

第Ⅳ章 墳裾部の調査

第1節 墳丘の構造

墳裾をもとめてEトレンチ東壁の土層断面（9図）みてみよう。現状の石積みの先端は2個の大石をもって石積み端部としているが、耕作土の上に設置されており本来のものではないことは明瞭である。これより50cm程奥まった所に2段積みの大石が存在する。小口積み状で、基部は角礫をあまり含まない第6層の茶褐色土上部に埋設されており、これが墳端部を形成する根石と考えられる。平面図（6・11図）にみるトレンチ南端の大石がこれにあたる。第3層（アミ掛け部）は改変時以降の崩落土で遺物を包含している。第4層はそれ以前の墳丘からの崩落土の可能性が高い。以上の点から5層の角礫混じりの黒色土は墳丘構築盛土と考えられる。NEトレンチの土層断面（8図）では基盤層の第6層が削り取られ段を形成し、その部位に不安定ではあるが石積みが認められ、この地点を墳裾とする。北側における墳丘の築造を整理してみると、基盤層の第6層に大石を設置し、または削り取りにより裾部を明確にすることにより古墳の領域を定めている。ただし、平面図（6図）をみる限り外周石列としての形態は認められない。墳裾1区および3・4区にみられる大石は根石ではなく石室構築材の転石



Ⅳ－1 墳裾部の調査（空中写真）

と考えられる。また、1区の巨石は墳端の外側にあり、墳頂部の第1主体部の調査結果と考え合わせると奥壁石材とも考えられる。また、Eトレンチで指摘した墳裾部の位置にはほぼ等間隔で弧を描きながら点在する大石に注目し（6・11～13図、密アミ掛け石）、墳裾を確定するための根石の役割を担っていた可能性もあることを指摘しておきたい。墳裾を確定後、第5層の角礫混じりの黒色土を盛り、墳丘を整えその上に石積みを行う工程が考えられる。一方、山側の南側墳丘に墳頂中心杭C2よりTWトレンチを設定した。調査の所見から根石の存在は認められないが、幅0.95m・深さ25cmの周溝状掘り込みが確認された。溝の墳丘法面には積石が施されており、この部位を山側墳裾とする。トレンチ内の墳丘は拳大から人頭大の角礫が不規則に積み上げられており、土壌はほとんど認められない。周溝状掘り込み部は山側ということもあり墳丘からの崩落石材が少なく、基本的に皆神山からの流入土が堆積している。これらの墳裾部の調査所見から本古墳は南北20.5m・東西22.5m規模のやや楕円形を呈する円墳と認識した。

【飯島・矢口】

第2節 遺物出土状況

墳丘清掃調査時の遺物の出土も著しく、土師器・須恵器の土器類の他に円筒埴輪片や鉄鏃等の鉄製品が採集されている。トレンチ・調査区からは墳丘崩落土中より墳丘石材と円筒埴輪片が出土し、墳裾1区から3点・NEトレンチから1点の鉄鏃が出土した。墳裾2区からは崩落土上層より鉄釘1点を得た。TWトレンチの積石部からの出土遺物は少なく、逆に周溝状掘り込み堆積土からは多量の円筒埴輪片そして人物埴輪片が出土している。人物埴輪片は手首のみの破片である。

【飯島】



IV-2 TWトレンチ（山側）



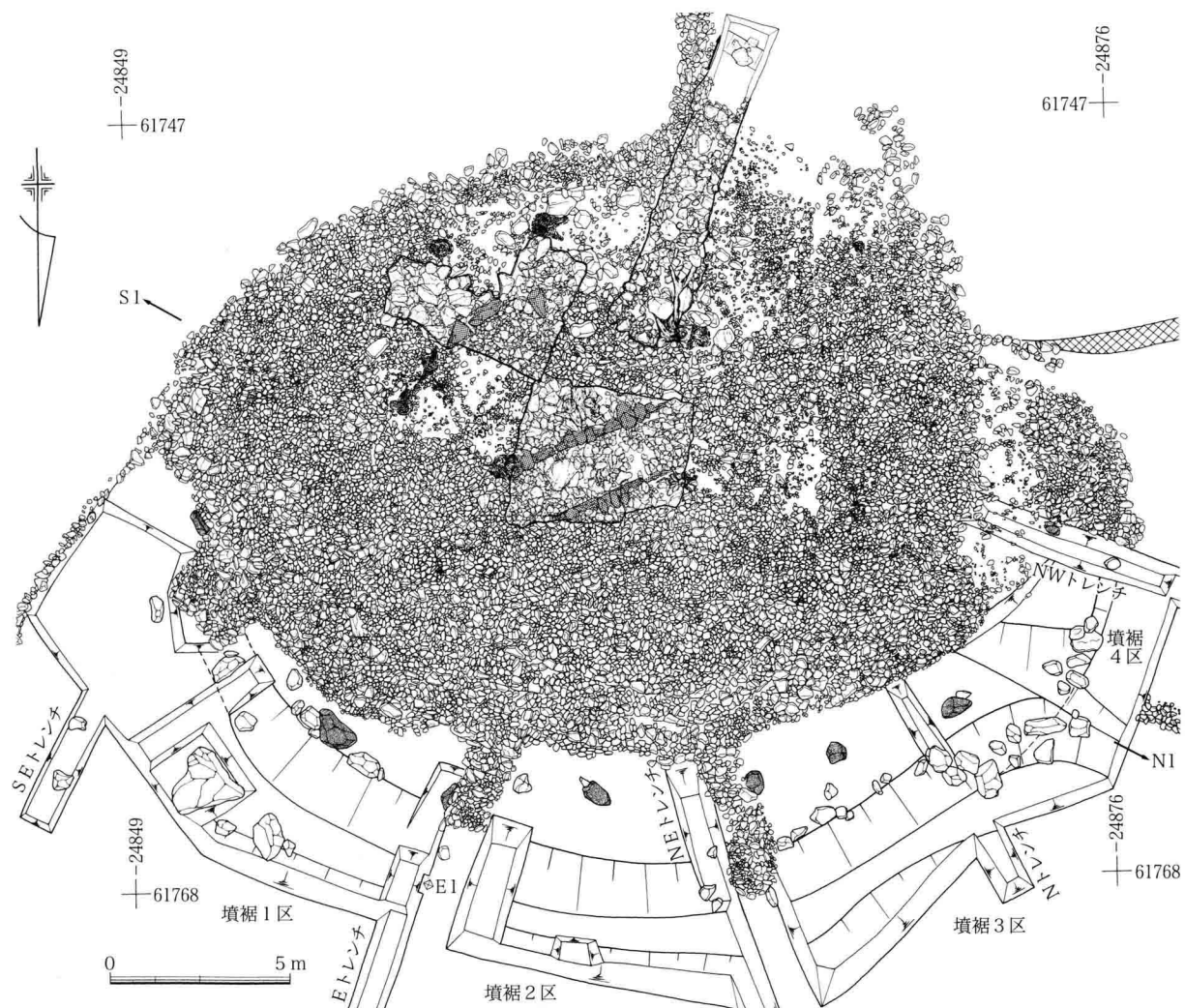
IV-3 NEトレンチ



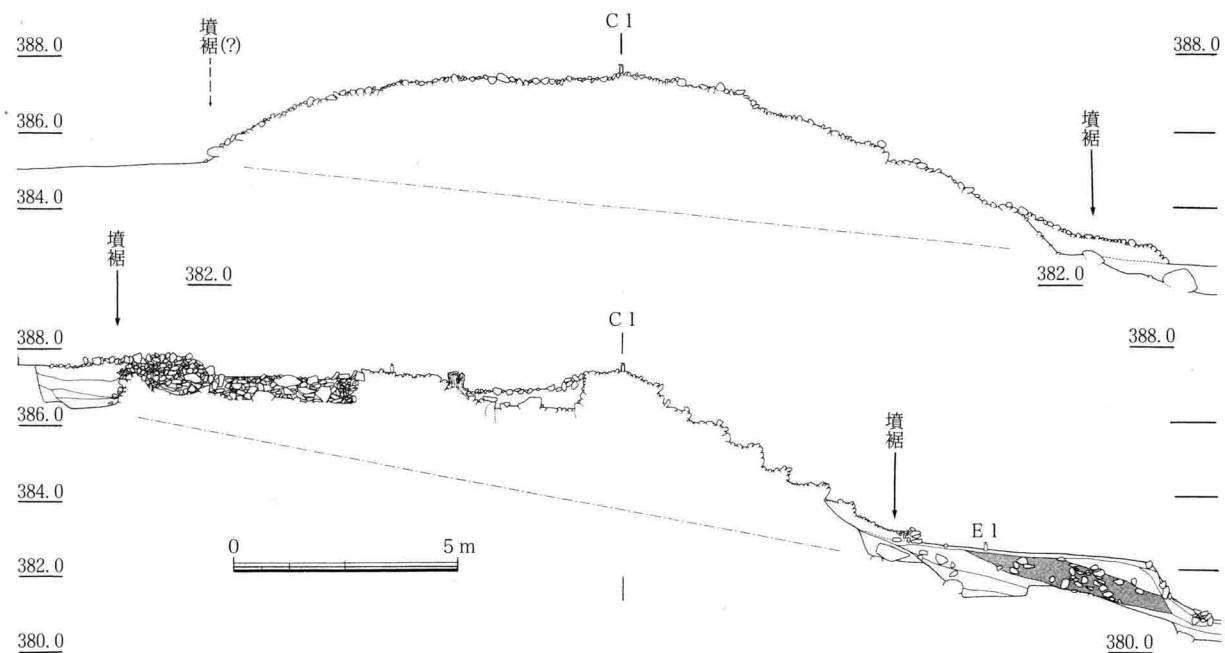
IV-4 Eトレンチ西壁対応



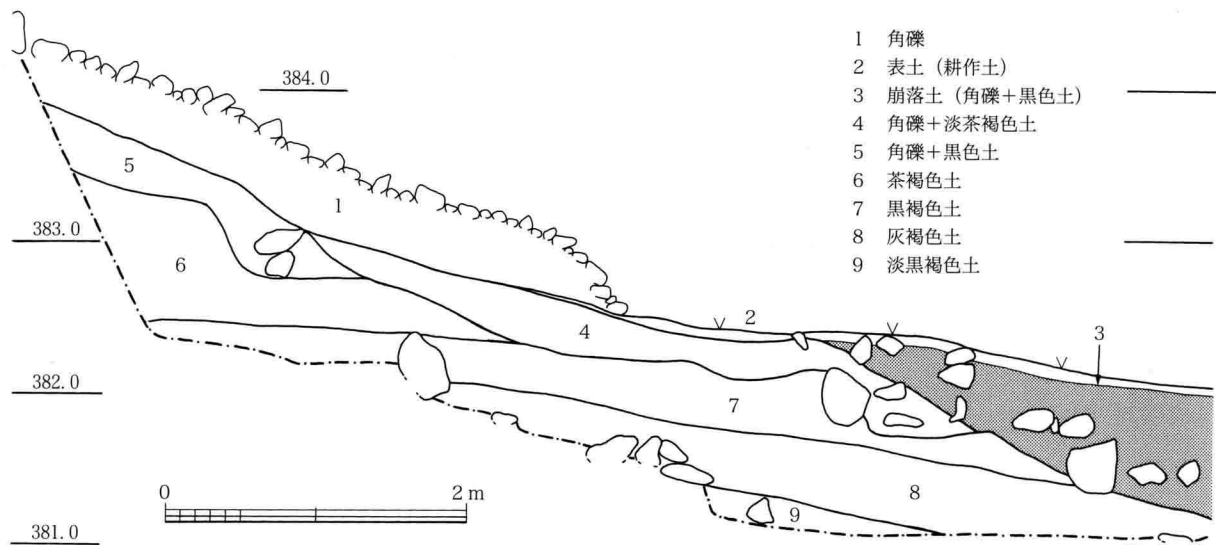
IV-5 墳裾1区（矢印は根石）



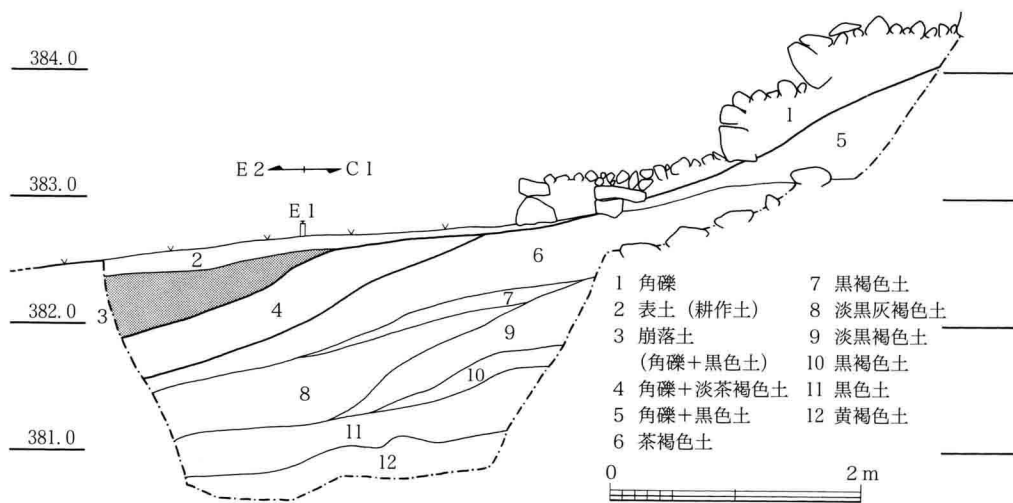
6 図 墳丘測量図（発掘調査後）(1:200)



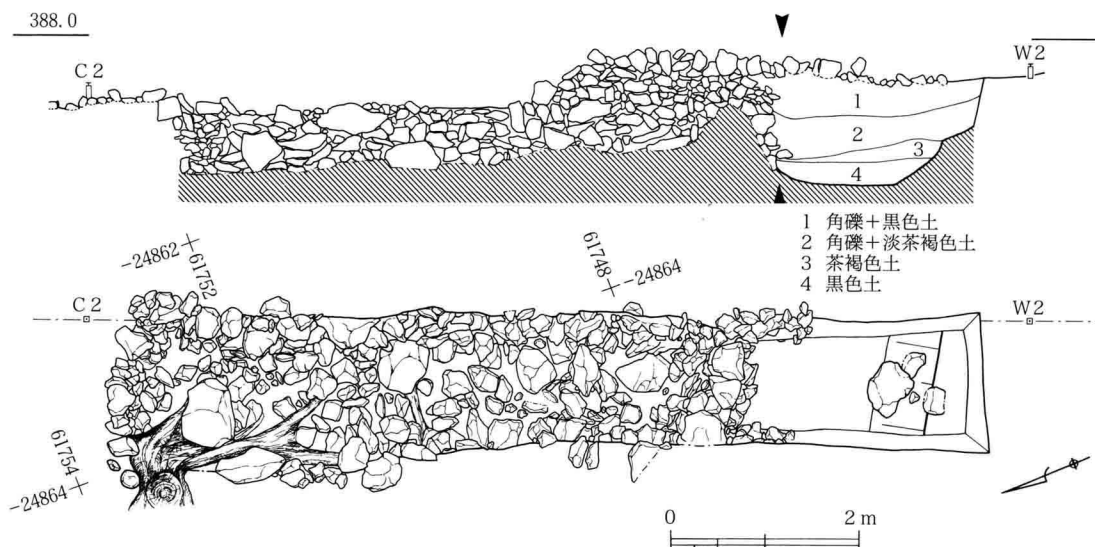
7 図 墳丘断面図（上 S1↔N1、下 W2↔E1）(1:200)



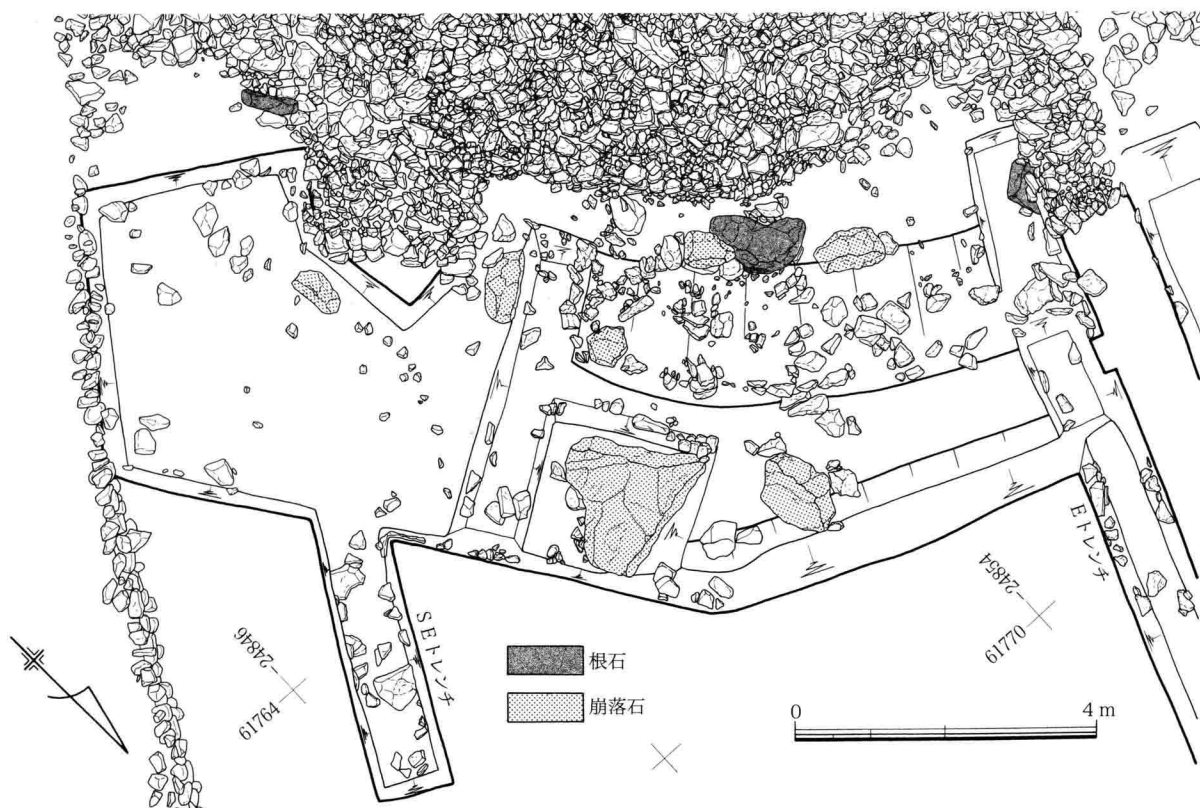
8図 墳裾2区NEトレンチ北壁断面図 (1:50)



9図 墳裾2区Eトレンチ東壁断面図 (1:50)



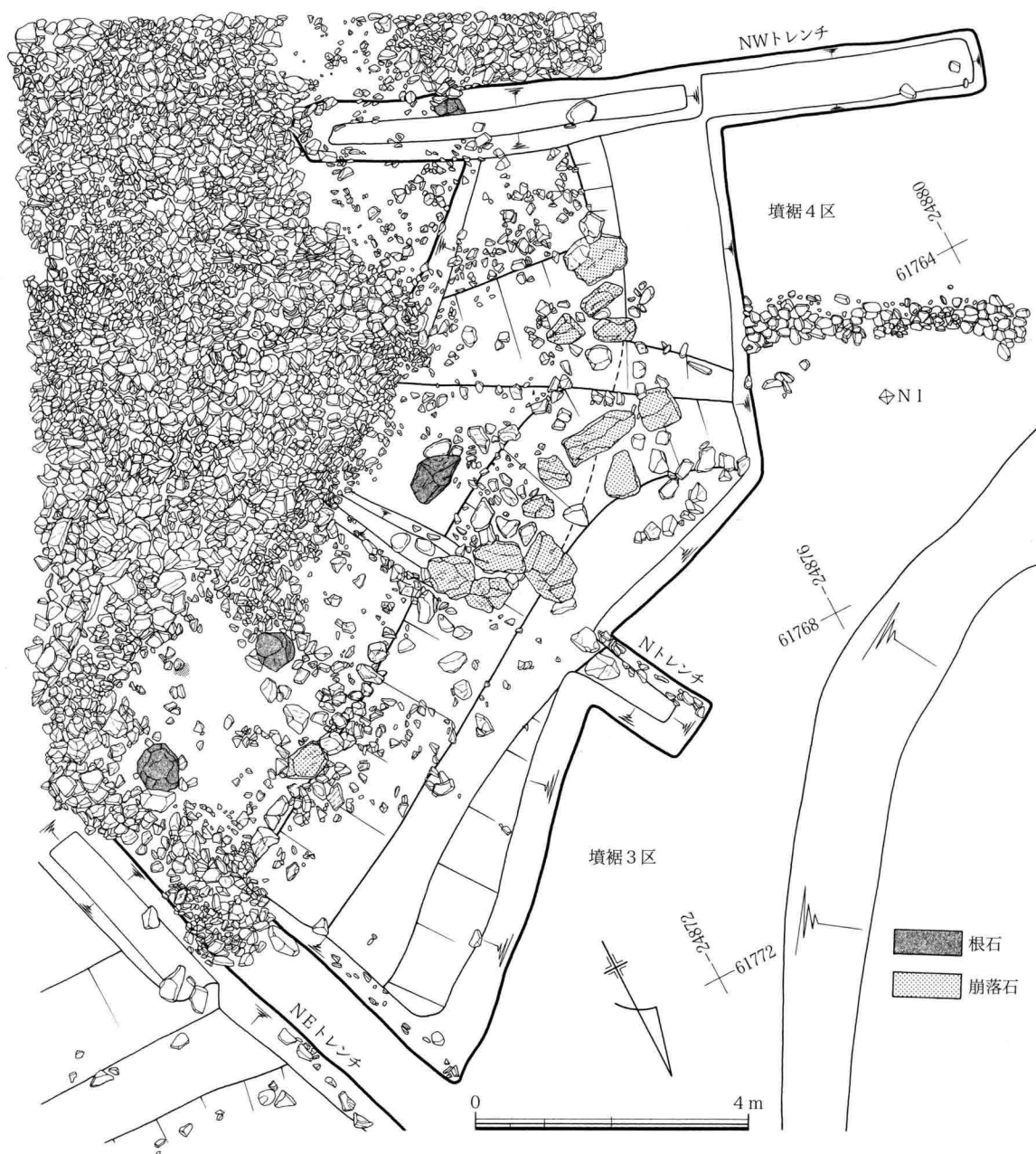
10図 TWトレンチ平面・側面実測図 (1:80)



11図 墳裾1区平面実測図 (1:100)



12図 墳裾2区平面実測図 (1:100)



13図 墳裾3・4区平面実測図 (1:100)



IV-6 Eトレンチ・墳裾2区



IV-7 墳裾3区 (矢印は根石)

第V章 墳頂部の調査

第1節 墳頂部破壊範囲確認調査

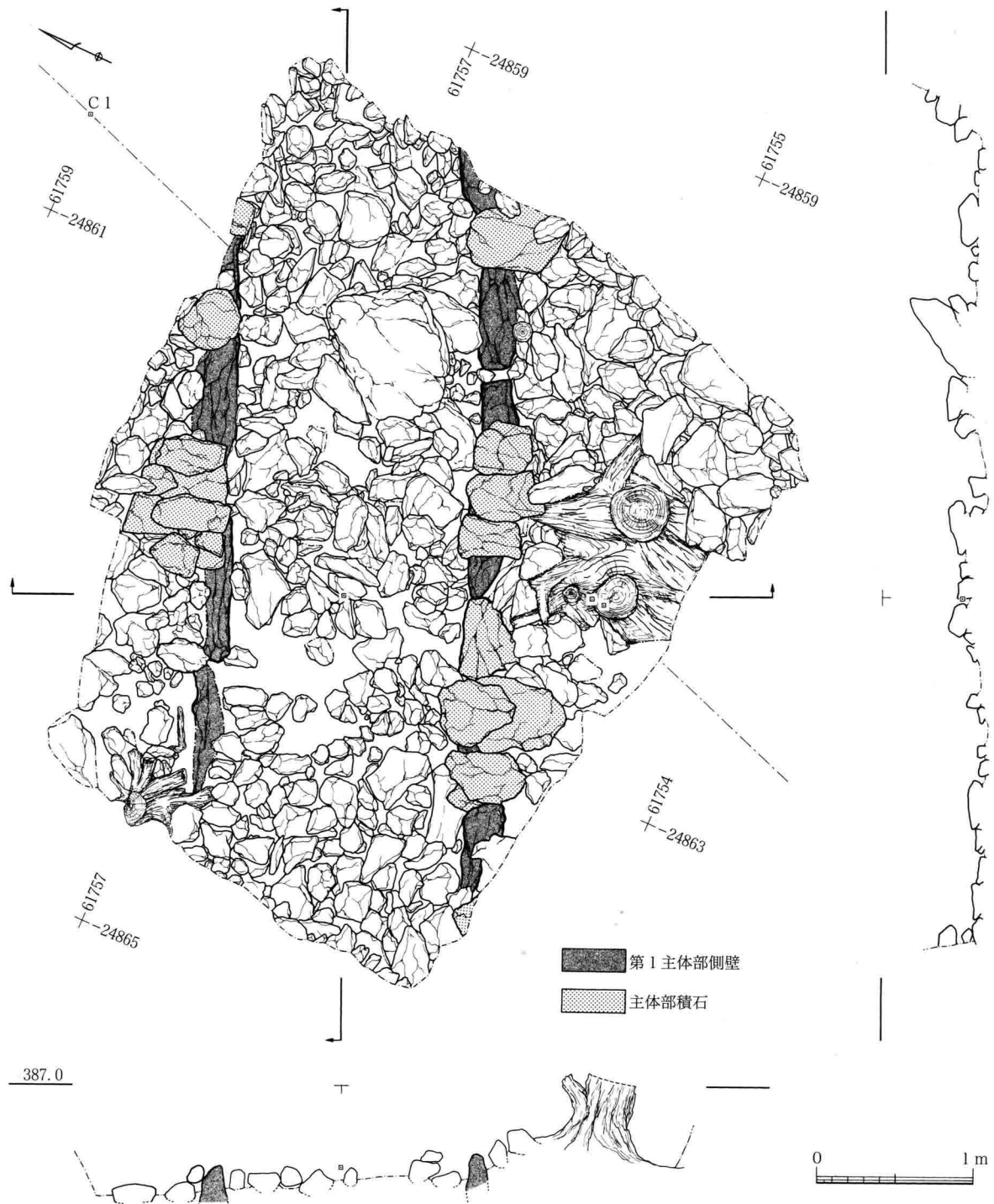
改変状況・主体部破壊範囲の確認を目的としたトレンチを墳頂平坦部に2カ所設定した。古墳の中心部に設定したものをTEトレンチ、大型石材が散乱している墳頂南東側のものをTSトレンチと呼称する(14図)。

1号主体部 TEトレンチは表面清掃レベルから約40cm掘り下げたところで石室の側壁を確認した。1号主体部と呼ぶ。天井石と側壁の上部は既に失っており、検出した部位は基底石(腰石)とその上部に2～3段の石室構築石が残存しているにすぎなかった(15図)。トレンチ内の玄室の幅は約1.5mで、基底石に板石を縦位に用い、その上部に扁平状石を小口積みにするタイプの石室と推定される(16図)。当初、近隣の菅間王塚古墳や竹原笹塚

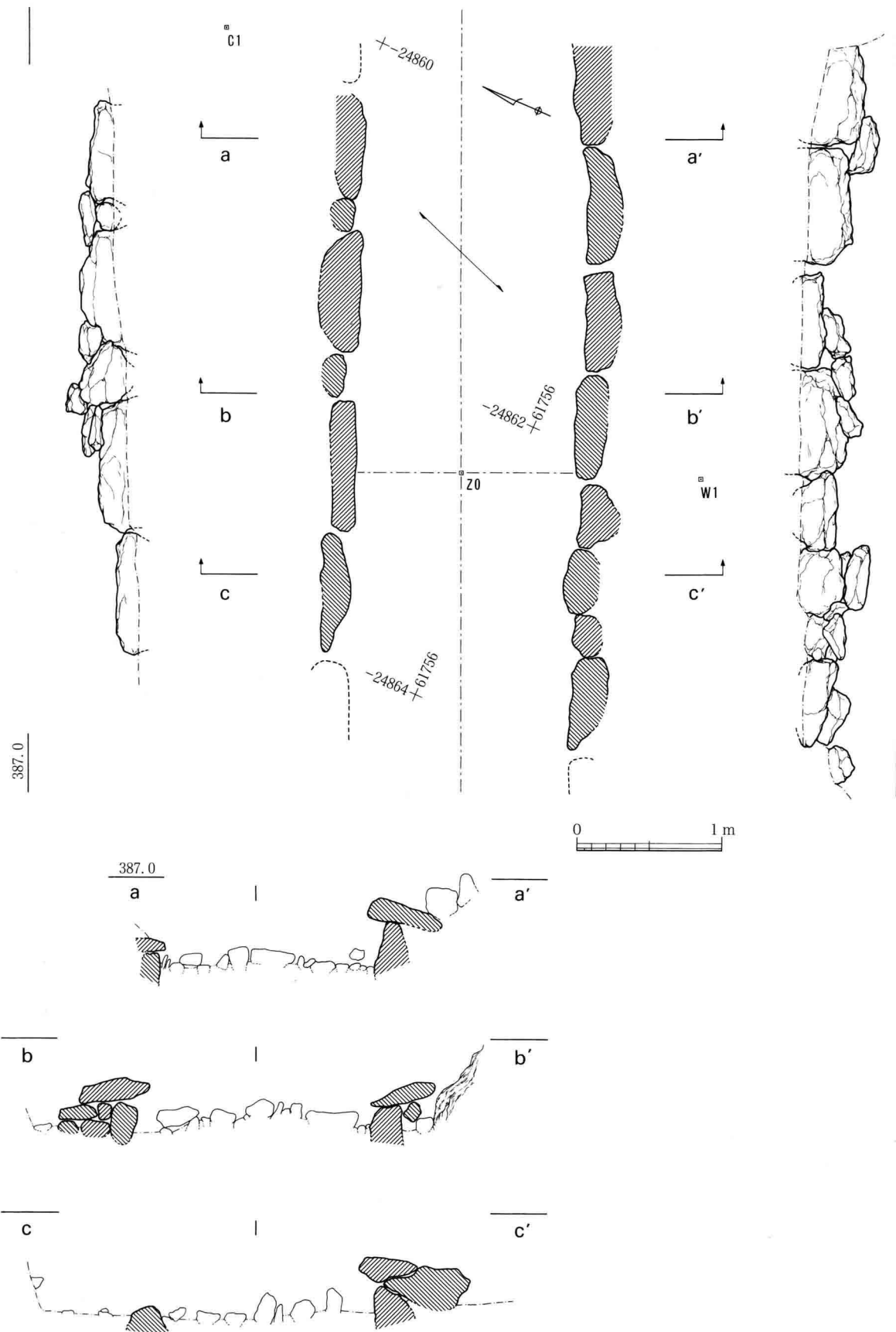


14図 墳丘トレンチ配置図(上TWトレンチ、下右TEトレンチ・第1主体部、下左TSトレンチ・第2主体部)(1:100)

古墳のような合掌形石室の主体部を想定したのであるが、側壁の構築工法から平天井の横穴石室と推定している。しかし、トレンチ内では奥壁・玄門・羨道等は確認されないし、板石の長軸幅面を縦位に用いて側壁を構築していることから箱形の石室の可能性も捨てきれない。石室の規模は不明であるが、現長5.80mを測る。墳裾1区で検出した巨石が奥壁の一部とすれば、奥壁は北北東方向にあったものと考えられる。石室の主軸は斜面に対して平行または若干山側を向くN66°Eを指し、ほぼ西南西方向の石室である。破壊範囲確認という調査目的のためこれ以上の調査を行わなかったが、石室床面まで更に50cm以上あり、積石内に構築されているものと推定される。石室内はベンガラと推定される塗料により施朱されていたものと思われ、その痕跡が所々に残存していた。



15図 TEトレンチ・第1主体部平面、断面実測図 (1:40)



16図 第1主体部立面・断面実測図 (1:40)

2号主体部 TSトレンチは石室構築材と思われる大型石材が散乱状態にあったので東西・南北方向にL字形に設定した。L字屈曲部から東側側壁と思われる2個の巨石が平坦面を内側に向け据えられており、南西部にも側壁に直交する1個の大石による立石が認められた(17図)。これらは石室の一部と考えられ、箱形の主体部になるものと推定される。2号主体部と呼称するが、破壊が著しく規模等は不明である。内部は拳大の石が敷き詰められており、この上下から集中して遺物が出土していることから床面と考えられる(18図)。床面の調査は上面で



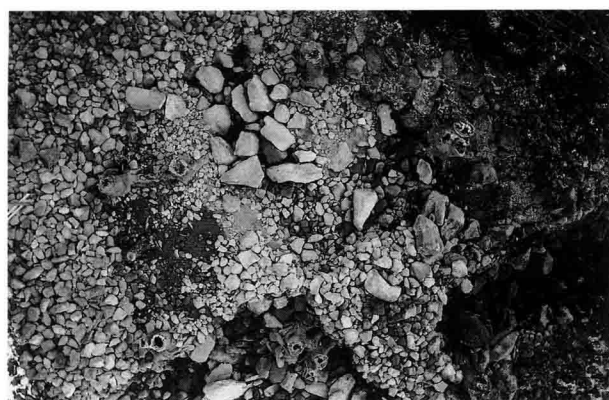
V-1 第1主体部(右)・第2主体部(左)



V-2 第1主体部(上空より)



V-3 第1主体部(北東より)



V-4 第2主体部(上空より)



V-5 第2主体部側壁

止めたが、石材の重なり状況から更に下層面がある可能性が高い。埋葬主体部の石室としては墳丘の中心より東に大きく偏っており、1号主体部の確認面よりも30cm程高いことから1号主体部より後に構築されたものである。

【飯島】

第2節 遺物の出土状況

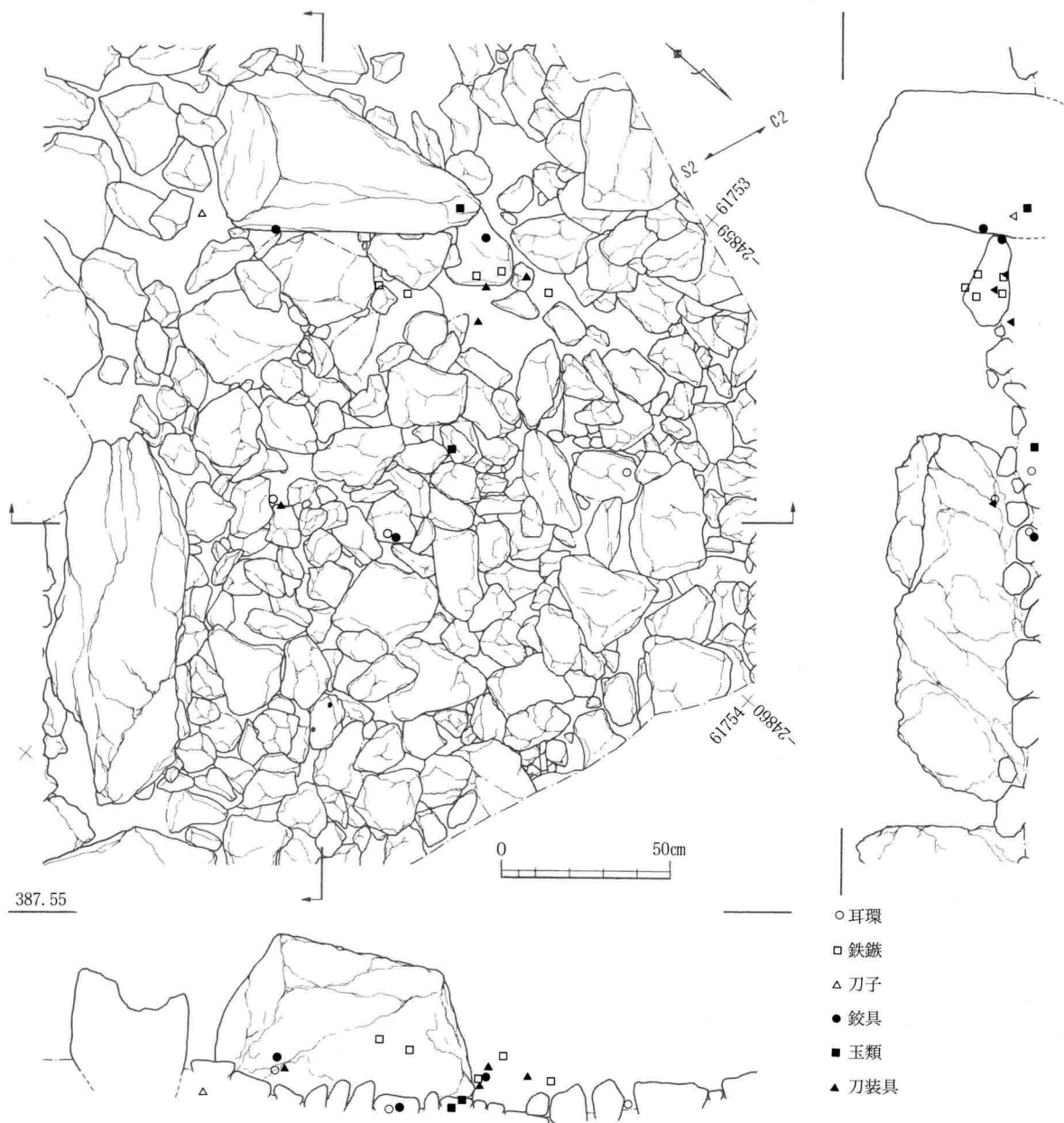
1号主体部は床面の調査がなされていないため、副葬品としての確証ある遺物は不明であり、覆土出土的性格を有していることからTEトレンチ出土として扱う。出土遺物には土師器・須恵器の他に鉄鏃2点・不明鉄製品1点があり、円筒埴輪片が石室被覆攪乱層から数点出土しているが混入品と思われる。

2号主体部は調査床面の上下から多くの副葬品と考えられる遺物が出土している(18図)。鉄鏃3点・刀子1点・鏑1点・鉸具等の武器・馬具類の他に、鉄芯銀張りを含む耳環3点・ガラス製白玉2点・管玉1点・土玉1点等の装飾品がある。

【飯島】



17図 TSトレンチ、第2主体部平面・断面・立面実測図 (1:40)



18図 第2主体部遺物出土位置図 (1:20)



V-6 TSトレンチ出土耳環



V-7 TSトレンチ出土鉄鏃

第Ⅵ章 出土遺物

1 土師器 (19図1～23)

器種には坏(1～5)・高坏(9～21)・甕(6・7)・蓋(8)・甕(22・23)が認められるが、すべて破片での出土である。図上での復元可能なものは墳頂に設定したトレンチから出土および墳頂での表面採集したものである。

坏は10個体前後あるものと推測され、図示したものは皿形で底部が丸味を帯び、体部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がる器形になる。外面は底部まで丁寧に横ヘラミガキが施され、内面も縦ヘラミガキで調整され光沢を帯びている。焼成も良好で茶褐色から黒褐色を呈する。ただし、5は平底で底径の数値が大きく、後出の所産かもしれない。この他に黒色土器片が少なからず出土しているが、調整は図示したものよりも雑なヘラミガキが施されている。出土地は3が墳頂表採、5がTSトレンチの他はTEトレンチである。[法量等] 1：口径13.0cm・器高(3.2cm)・遺存1/4、2：口径12.1cm・器高(3.0cm)・遺存1/2、3：口径12.0cm・器高(2.8cm)・遺存1/6、4：口径12.3cm・器高3.3cm・遺存1/4、5：底径9.6cm・遺存1/5

甕は3個体が確認でき、図示できたものは2個体である。外面の調整は坏と同様のヘラミガキであるが、内面はナデによっている。出土地は6がTEトレンチ、7が墳頂表採である。[法量等] 6：体部径8.6cm・遺存1/4、7：体部径8.0cm・遺存1/3

蓋はツマミ部のみがTEトレンチから出土し、内外面共にヘラナデ調整が施される。

高坏はTEトレンチを中心に出土がみられたが、すべて破片で散在状況にあった。ちなみに9がTWトレンチ、13・14・17が墳頂表採である。図示したものは坏部7個体・脚部6個体であるが、共に接合するものがなく都合13個体以上存在していたものと考えられる。調整は脚部内面を除きヘラミガキによるが、坏や甕にみられた幅狭(1～3mm前後)の工具による丁寧な調整が認められるものは16の1個体にすぎない。9・11・13～15の内面は黒色処理が施されている。[法量等] 9：口径9.0cm・遺存1/5、10：口径29.0cm・遺存1/5、11：口径17.8cm・遺存1/7、12：13.8cm・遺存1/5、13：口径20.0cm・遺存1/6、14：21.8cm・遺存1/5、15：口径17.4cm・遺存1/6、16：底径15.0cm・遺存1/4、17：坏部接着ホゾ抜け・遺存3/4、18：遺存3/4、19：遺存3/5、20：遺存1/2、21：遺存1/3

甕は数個体あるようであるが、図示できるものは2個体にすぎない。出土地は22がTWトレンチ、23が墳頂表採である。口縁部内外面と体部外面はヘラミガキが施され、体部内面はヘラナデで調整されている。23は小型の甕の底部である。調整は外面が縦ヘラミガキ、内面がヘラナデである。[法量等] 22：口径18.7cm・遺存1/6、23：底径5.7cm・遺存ママ

2 須恵器 (19図24～51、20図52～62、21図63・64、22図65・66)

器種には蓋(24～29)・坏(30～37)・甕(38)・椀(39)・短径椀(41)・短頸壺(40)・高坏(42～51)・甕(52～58)・フラスコ形長頸瓶(59)・堤瓶(60・63・64)・平瓶(61・62)・横瓶(65・66)などがある。すべて破片での出土であり、甕・瓶類は同一個体と推定される破片をもとに大胆に復元図化を試みた。そのため法量等に若干の齟齬が生ずる可能性がある点お断りしておく。

蓋の器形がわかるものは6個体ある。天井部と口縁部境の突出する稜はみられなく、凹線で区画するもの(24)が1個体あるにすぎない。他は天井部から口縁部にかけて内湾しながら外開する器形になる。ただし、25は平坦な天井部から口縁部へ直に近い屈曲度になる。天井部は平坦で回転ヘラケズリが施されるもの(24・25・29)と

ヘラキリで未調整のもの（26～28）の2種があり、総体に雑な仕上げである。陶邑編年でT K43併行期前後の年代を想定する。出土地は27が墳頂表採である他はT Eトレンチである。[法量等] 24：口径15.6cm・器高4.0cm・遺存1/8、25：口径15.4cm・器高4.2cm・遺存1/8、26：13.4cm・器高3.4cm・遺存1/4、27：遺存1/6、28：口径13.4cm・器高3.6cm・遺存1/10、29：口径13.2cm・器高（3.5cm）・遺存1/8

坏は8個体確認されている。器形は小型化し、口縁部のたちあがりは短く内傾する。器高も低くなり底部も平坦化する。30の口縁部のたちあがり是他のものより長く古相の様相がうかがえる。調整も蓋と同様雑で、33・36・37の底部はヘラキリで未調整である。陶邑編年で30がT K10新併行期、他は蓋と同時期をもとめる。出土地は36のみT Sトレンチで、他はT Eトレンチである。[法量等] 30：口径11.4cm・遺存1/4、31：口径10.2cm・遺存1/4、32：器高11.8cm・遺存1/6、33：口径11.8cm・器高4.0cm・遺存3/4、34：遺存1/5、35：口径12.6cm・器高3.5cm・遺存1/8、36：口径（11.0cm）・器高（3.4cm）・遺存1/8、37：口径11.4cm・器高（3.8cm）・遺存1/4

甕は1個体検出している。体部から底部にかけては丸味を帯びているが肩部は扁平状になる。頸部は厚手で細く筒状をなし、口縁部はラッパ状に外開し、口唇部が直立する。文様は口頸部の上下を2条の浅い沈線文で区画し内部を細かいヘラ描き羽状文を充填し、円孔上下にも口頸部同様に沈線文を巡らし1帯の斜行短線文を施している。円孔は上向きに突出する。肩部や口頸部内面には自然釉が掛かり窯屑が付着するなど製品としてはよくない。T Sトレンチ出土である。[法量等] 38：体部最大径8.5cm・遺存（体部ほぼ完存）

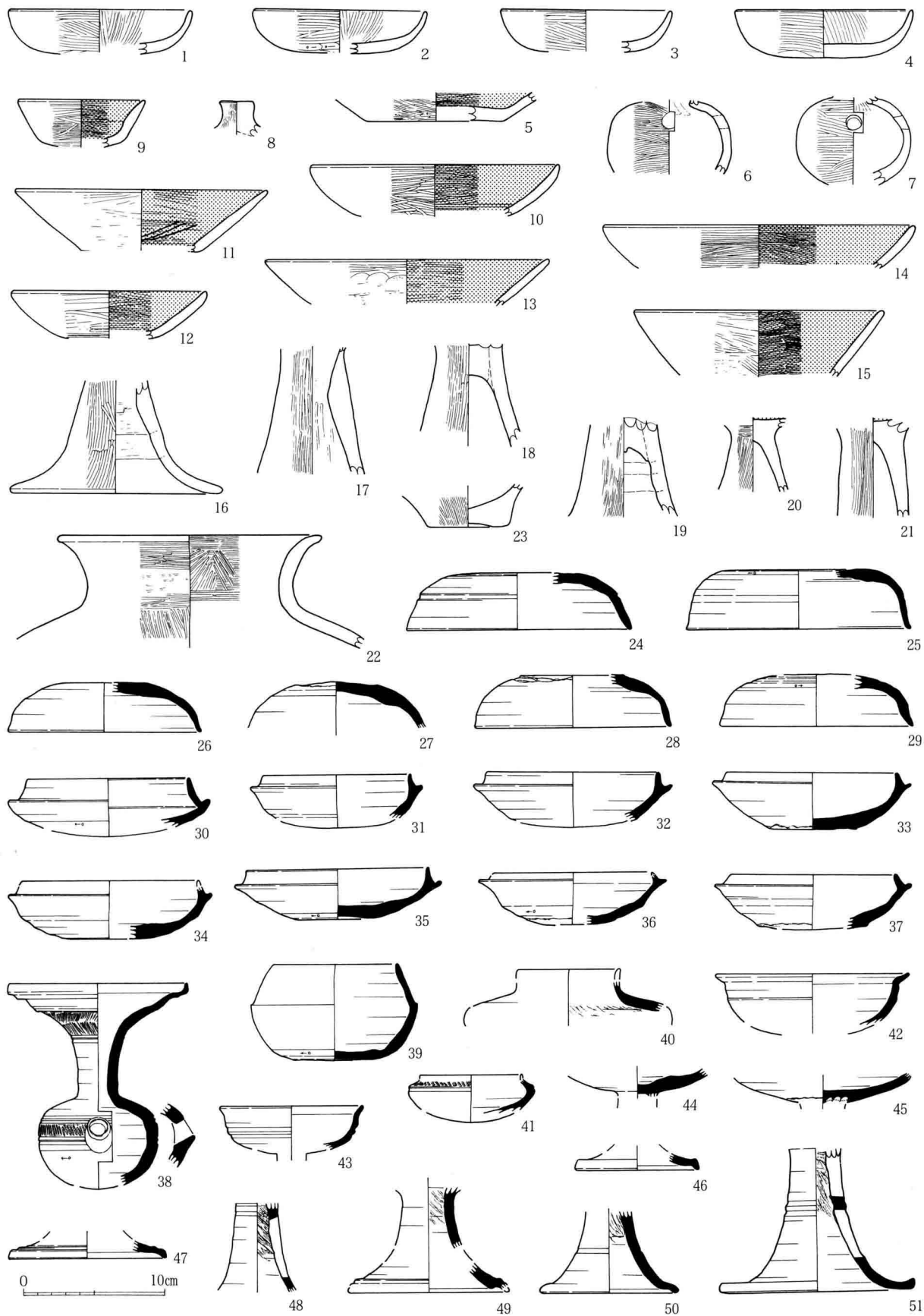
椀は1個体出土している。体部は丸味を帯びて口縁部との境に有段の稜をつくりだし、口縁部が直線的に内傾しながらたちあがる。底部は平坦で回転ヘラケズリが施される。T Eトレンチ出土である。[法量等] 39：口径8.6cm・器高6.7cm・遺存1/4

短頸椀と称したが、体部等の器形は坏に近く扁平なものである。口縁部は欠損しているが短く直立するものと思われる。器体の最大径部に1条の沈線文を、肩部に櫛状工具で連続刺突文を巡らす。T Eトレンチ出土である。

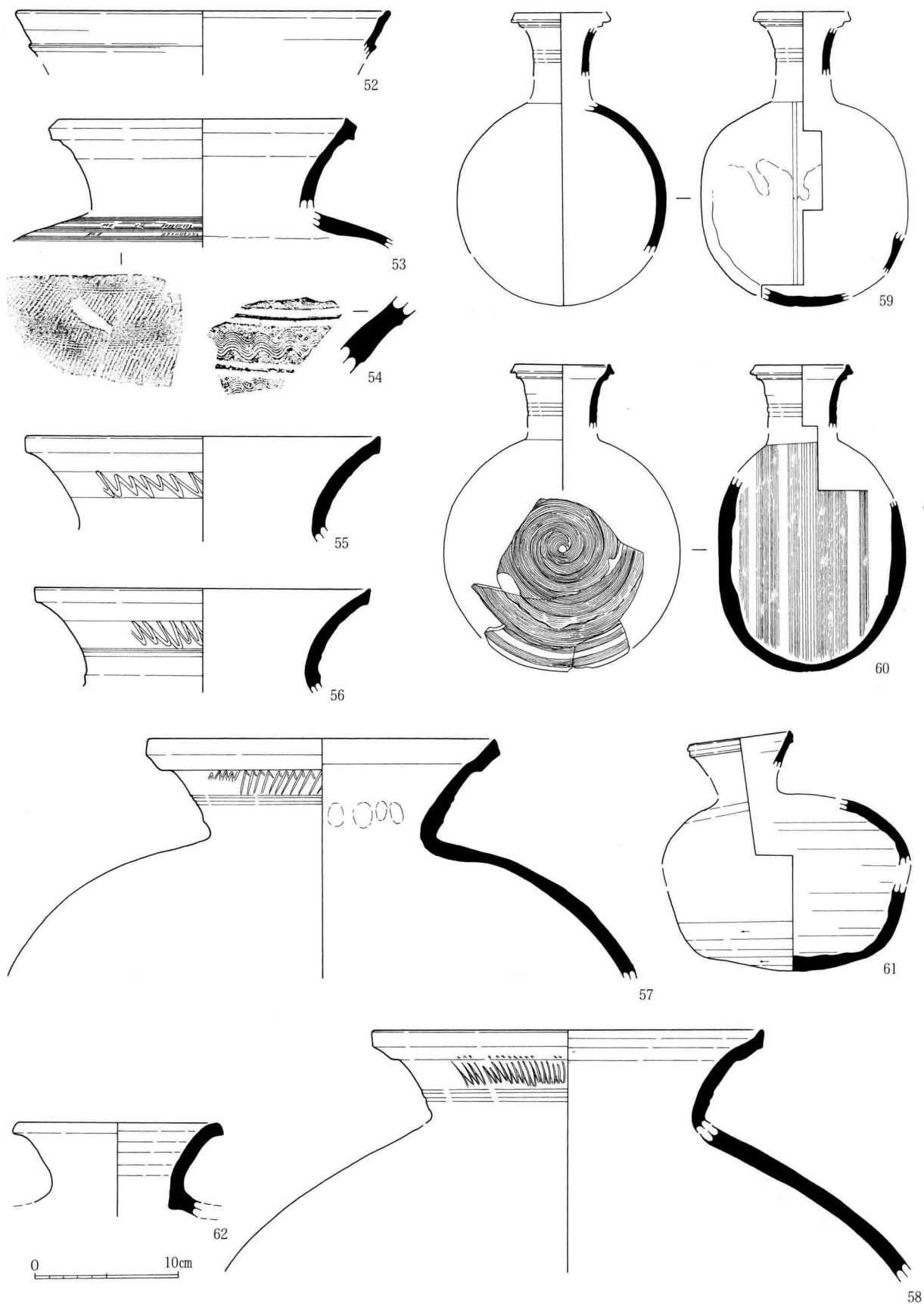
短頸壺は1個体確認される。口縁部および体部以下は欠損しているが、口縁部は短く直立する壺形の器形になるものと思われる。T Sトレンチ出土で、遺存度は4分の1である。

高坏は器形のうかがえるもの9個体を提示したが、すべて破片での出土で全形を知りうるものはない。出土地は42のT Sトレンチ、49・50の墳丘表採の他はT Eトレンチである。坏部の器形は口縁部が外開し、体部から底部にかけて丸味を帯びる。42の頸部には凹線文が巡り、体部に鈍い稜がみられる。43の体部と底部境に2条の平行沈線文が施される。脚部は円筒部が細長く、内部上端には絞りによる皺が認められる。裾部はラッパ状になり、端部が屈曲し嘴状を呈するもの（46・47・50）と外開したままのもの（51）がある。施文は脚部中央付近に1条（50）または2条（48・51）の沈線文を巡らせ、裾端部に凹線文が認められる（47・49）。透かしは長脚2段2方向のもの（48・51）と短脚無透かしのもの（50）がある。年代的には陶邑編年T K43併行期前後の所産であろう。[法量等] 42：口径13.2cm・遺存1/4、48：遺存1/2、49：遺存1/3、50：底径9.2cm・遺存1/3、51：底径13.6cm・遺存2/5

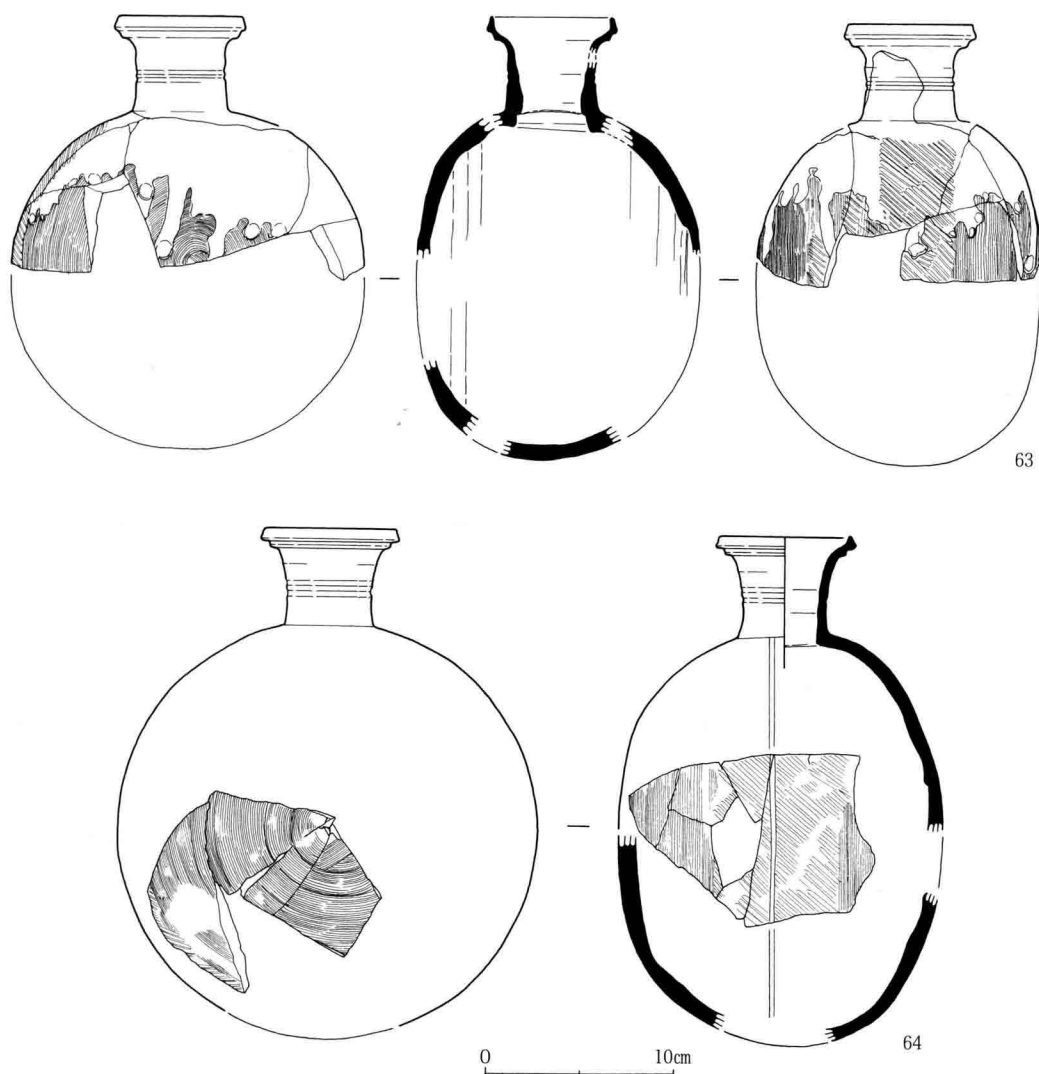
甕の出土量は他の器種に比較して全体の半分程の量になるものの、すべて破片で全形を図上で復元可能なものは口縁部および頸部付近の6個体にすぎない。口縁端部の形態は直線的で稜をなすもの（52）、菱形状のもの（53）、三角形のもの（55・56）、長方形のもの（57）、後者2形態の中間的なもの（58）がある。頸部施文は平行沈線文による区画帯を櫛描き波状文が巡るもの（54）、頸部の鈍い稜と下部平行沈線文間をヘラ描き波状文で埋めるもの（55～58）がある。肩部および体部にはタタキメがみられ、53には浅い櫛描き平行線文が施される。出土地は53・55・57がT Sトレンチ、56・57がT Eトレンチ、54がNWトレンチである。[法量等] 52：口径25.8cm・遺存1/10、53：口径21.6cm・遺存1/5、55：口径25.0cm・遺存1/6、56：口径23.6cm・遺存1/5、57：口径24.6cm・遺



19図 土師器・須恵器実測図 (1:4)



20図 須恵器実測図 (1:4)



21図 須恵器実測図 (1:4)

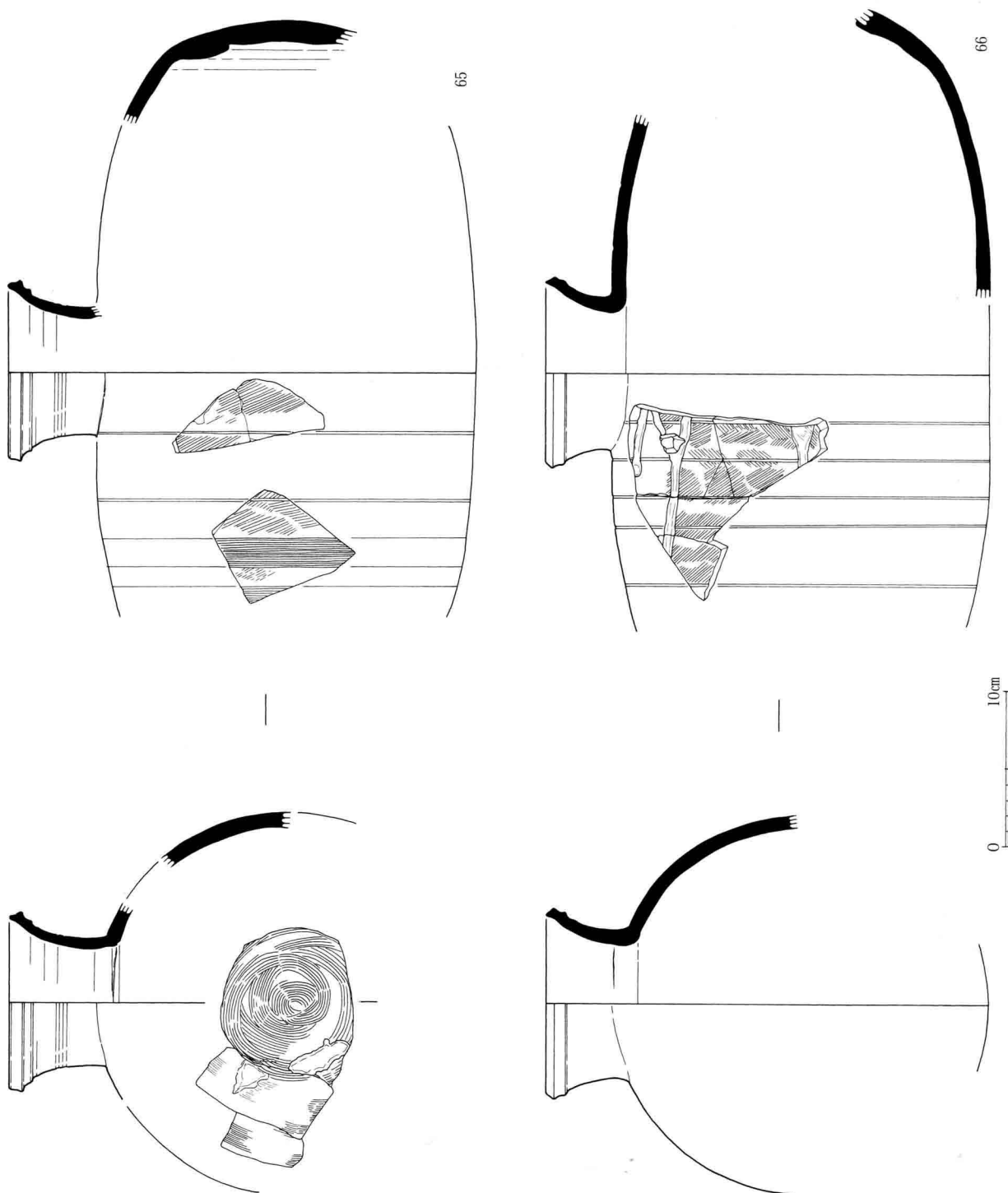
存1/6、58：口径27.4cm・遺存1/4

・ フラスコ形長頸瓶が1個体出土しているが、図上復元では7個の破片に基づいている。破片における遺存度は10分の1以下であり、口縁部の形態復元は堤瓶（60）を参考にしている。また、法量等も推定の域をでない。体部が球形を呈する他は堤瓶の成形・調整に近似する。頸部に2条の平行沈線文が施され、体部に1条の縦位沈線文がみられる。全体に自然釉が掛かる。

堤瓶は3個体を抽出したが、上記の長頸瓶と同様にサーカスのな復元図である。口縁部は外開し、端部が折り返され嘴状を呈し、直下に沈線文を巡らし段を形成する。体部は偏球形を呈するが、正面の丸味が少ない。頸部に2条の平行沈線文が施される。体部の正面および裏面は渦巻き状のカキメ調整痕がみられるものの、側面はカキメ調整痕のもの（60）とタタキメ調整痕を残すのもの（63・64）がある。64には体部に1条の縦位沈線文がみられる。63には深緑色の自然釉が厚く掛かり窯屑が付着する。出土地はT E トレンチのものが多い。[法量等]

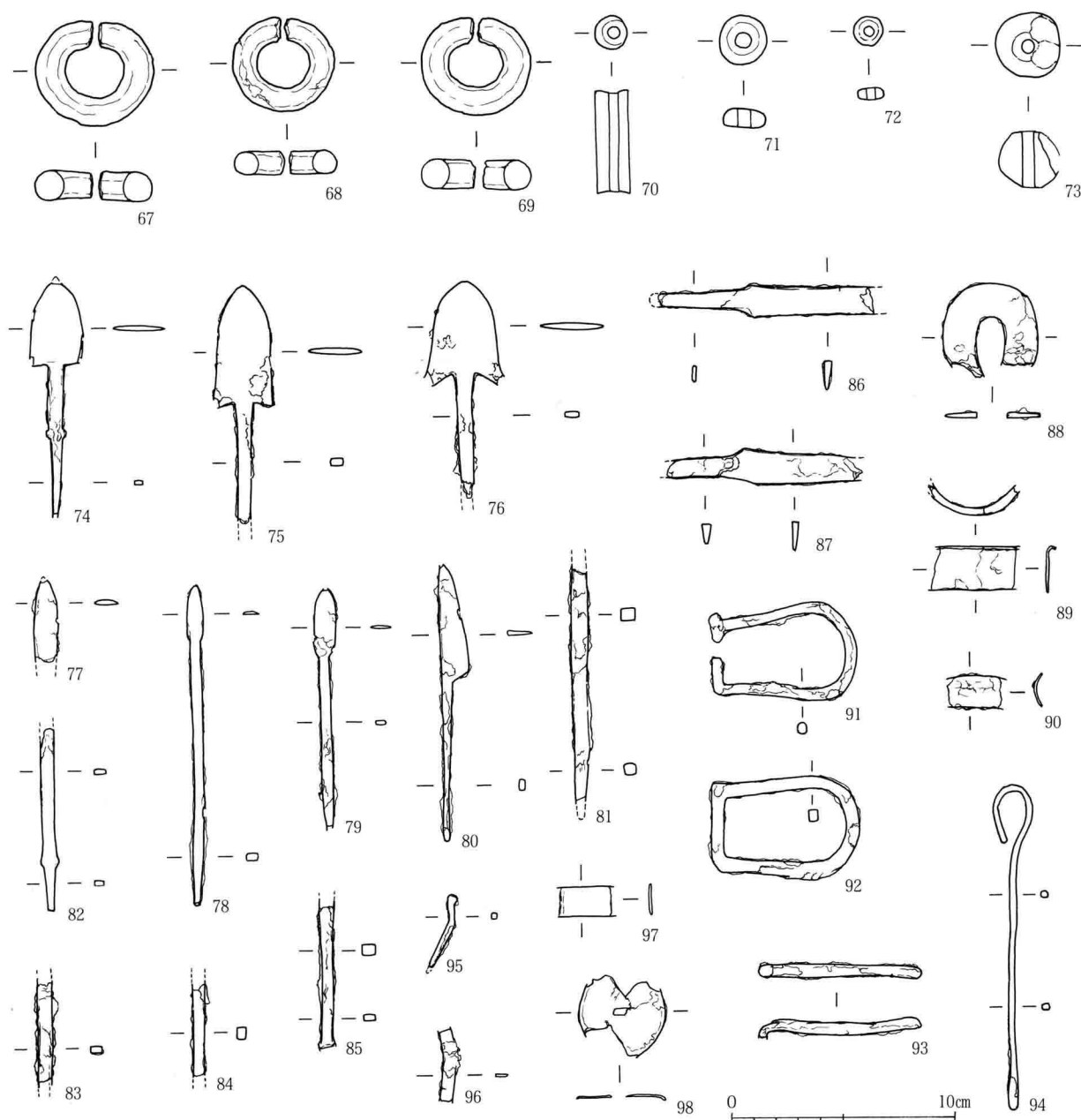
60：口径6.4cm、63：口径6.4cm、64：口径6.5cm

平瓶は2個体みられ、T E トレンチを中心に破片での出土である。口縁部は61が凹線文により稜をなし、62は素縁である。肩部と底部は丸味を帯び全体的に偏球形状を呈するものと思われる。底部の調整は回転ヘラケズリである。[法量等] 61：口径7.0cm、62：口径14.8cm



22図 須恵器実測図 (1:4)

横瓶は2個体抽出される。大型の器体のためか破片量は他の器種に比べ甕片に次いで多い。口頸部は短く外開し、端部が凹線文により稜状に段をつくりだす。体部前面は球形を呈し、埴瓶と同様な渦巻き状カキメ調整痕がみられる。側面は俵形を呈し、斜行または羽状のタタキ調整が施され、その後数本からなる縦位の平行沈線が施文される。65にはカキメ、66には深緑色の自然釉がみられる。[法量等] 65:口径11.0cm、出土地TEトレンチ・TSトレンチ・墳頂表採、66:口径11.4cm、出土地TWトレンチ・墳頂表採



23図 鉄・ガラス・土製品実測図 (1:3、67~69は1:2、70~72は1:1)

3 装飾品 (23図67~73)

装飾品は耳環3個(67~69)・管玉(70)1個・ガラス小玉(71・72)2個・土製丸玉(73)1個が出土している。すべてTSトレンチからのものである。[法量等] 67:鉄芯銀環・外径3.2~3.5cm・内径1.5~1.8cm・芯径9mm、68:鉄芯銀環・外径2.2~2.5cm・内径1.1~1.4cm・芯径7mm、69:鉄芯金環・外径3.0~3.3cm・内径1.4~1.6cm・芯径8.5mm、70:碧玉・長1.55cm・外径5mm・孔径1.5mm、71:ガラス(コバルトブルー)・外径7mm・高3mm・孔径2mm・上下面ミガキ、72:ガラス(コバルトブルー)・外径4.5mm・高2mm・孔径1.5mm・上下面ミガキ、73:土(黒褐色)・直径1.0cm・孔径2mm・ミガキ光沢

4 鉄製品 (23図74~96)

鉄製品はTSトレンチ(77・78・81・83~86・88~96・98)・TEトレンチ(74・97)・墳頂表採(87)・墳裾調

査区（75・76・79・80・82）などから少なからず出土している。小破片化しており、腐食も進んでいるため図化または種類の判別が困難なものが多い。製品種別では鉄鏃（74～85）・刀子（86・87）・鏑（88）等の武器類、刀装具？（89・90）、鉸具（91～93）。釘（96）、不明製品（96～98）などが出土している。

鉄鏃は短頸鏃（74～76）が3本認められる他は長頸鏃と思われる。鏃身の形態は平根で三角形状を呈する扁平丸造りの短頸鏃、細身で柳葉形・片丸造りのもの（77～80）、刀子形を呈するもの（80）がある。平根鏃の鏃身部関は水平に近いもの（74）と逆刺を作り出しているもの（75・76）がある。74はほぼ完形品で、棘状突起までの篋被は短く、篋被の断面は長方形を呈する。78～81には篋被と茎を分ける棘状突起が認められない。81～85は篋被部と茎部であり、82と85に棘状突起がみられる。[法量等] 74：現長10.2cm・鏃身長（4.0cm）・鏃身幅（2.48cm）、75：現長10.4cm・鏃身長5.3cm・鏃身幅（2.8cm）、76：現長9.8cm・鏃身長（4.8cm）・鏃身幅（4.0cm）、77：現長3.5cm・鏃身幅1.1cm、78：全長14.5cm・鏃身長2.5cm・鏃身幅8mm、79：現長10.5cm・鏃身長（3.0cm）・鏃身幅1.0cm、80：全長12.5cm・鏃身長（5.2cm）・鏃身最大幅1.3cm

刀子は2個出土している。86は両関で、87は片関である。[法量等] 85：現長9.8cm・関部幅1.4cm・茎幅7mm、86：現長8.8cm・関部幅1.5cm・茎幅8mm

刀装具は卵倒形の鏑が1個出土している。この他89・89の楕円形を呈する製品も刀装具類と推測している。[法量等] 88：幅4.3cm・厚2.0mm、89：幅2.0cm・厚1mm、90：幅1.0cm・厚1mm

鉸具は92と93がセットになるものと考ええると2個出土している。ともにT Sトレンチからの出土である。[法量等] 91：長6.6cm・最大幅4.4cm、92：長6.6cm・最大幅4.7cm、93：外長7.4cm・内長6.7cm

釘は数本あるようであるが、図化できるものは1点にすぎない。[法量等] 95：現長3.7cm・墳裾2区

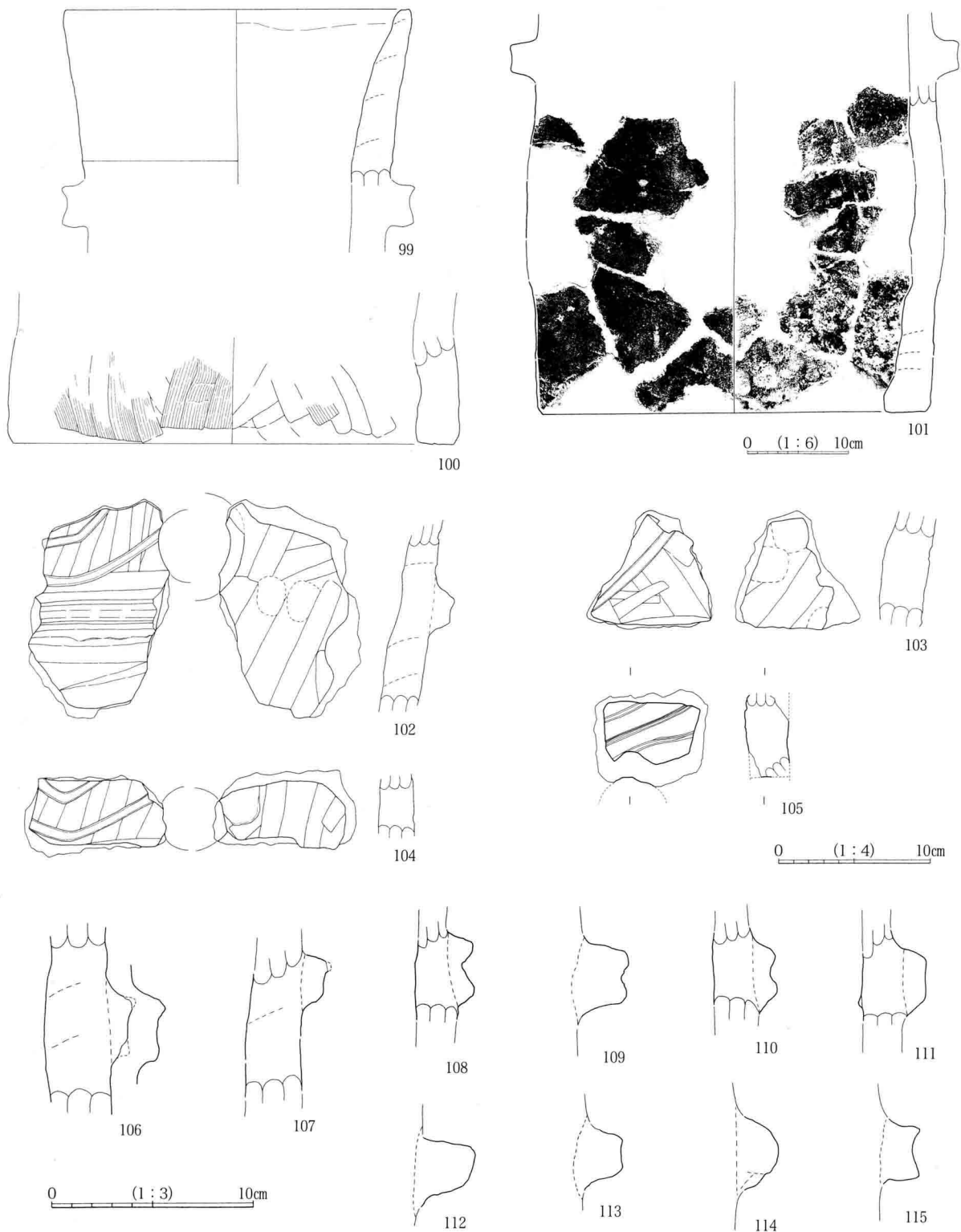
用途不明鉄製品は棒状で片方の先端が折り返され環状になり、他方の先端が叩き潰されるもの（94）、棒状で薄板になるもの（96）、細板状のもの（97）、円板状のもの（98）等がある。[法量等] 94：全長14.8cm、96：幅6mm・厚1mm、97：幅1.4cm・厚1mm、98：直径3.9cm・厚1mm

【以上 矢口】

5 埴輪（24図99～115、25図116～120、26図121～132）

円筒埴輪（図99～115）は出土埴輪の主体を占めるが、細片が多く実測可能個体は極めて少ない。99は口縁部片で復元口径22.6cmを測る。口縁は外反せずに直線的に延び、端部に面をもつ。破片下端部外面には強いヨコナデ調整が観察され、直下に突帯が貼付けられたものと考えられる。内外面ともにヨコからナナメ方向のナデ調整が施される。墳丘S Eトレンチならびに墳端部T Wトレンチより出土した。100は底部片で、復元底径29.2cmを測る。板状粘土を丸めて基部を成形し、接合痕跡が1カ所確認できる。内外面ともにハケ調整が施される。ナデ調整が主体となる埴輪群中で、数少ないハケ調整の資料である。胎土には石英・雲母粒を含む。墳頂部T Wトレンチから出土した。101は底径38cmを測る大型の底部片である。器壁も4.5～3cmと非常に厚い。重量も相当あったものと想定され、底部は自重のために内側に大きく歪んでいる。基部は粘土紐積み上げによって成形されたものとみられ、内外面に指頭圧痕が多数残る。調整は内外面ともにヨコからナナメ方向のナデ調整が施される。残存上端には強いヨコナデが観察され、この直上に突帯があったものと考えられる。

線刻を施す埴輪は4片確認された。いずれも円筒片であるため、円筒埴輪として報告する。102は突帯上部に二条の弧線が線刻された破片である。線刻は幅広で浅く、底面が平坦であり、鋭利な工具等によるものではない。断面M字形の突帯貼付け後に線刻される。線刻後、円形のスカシが穿孔されている。胎土には雲母粒が確認される。調整は内外面ともにナデ調整である。103は102同様に二条の弧線が線刻された破片である。破片下端外面にはヨコナデの痕跡が残り、同様に突帯上部に線刻されたものと考えられる。円形のスカシ孔も確認できるが、線



24図 円筒埴輪実測図 (99・100は1:4、101は1:6、102～115は1:3)

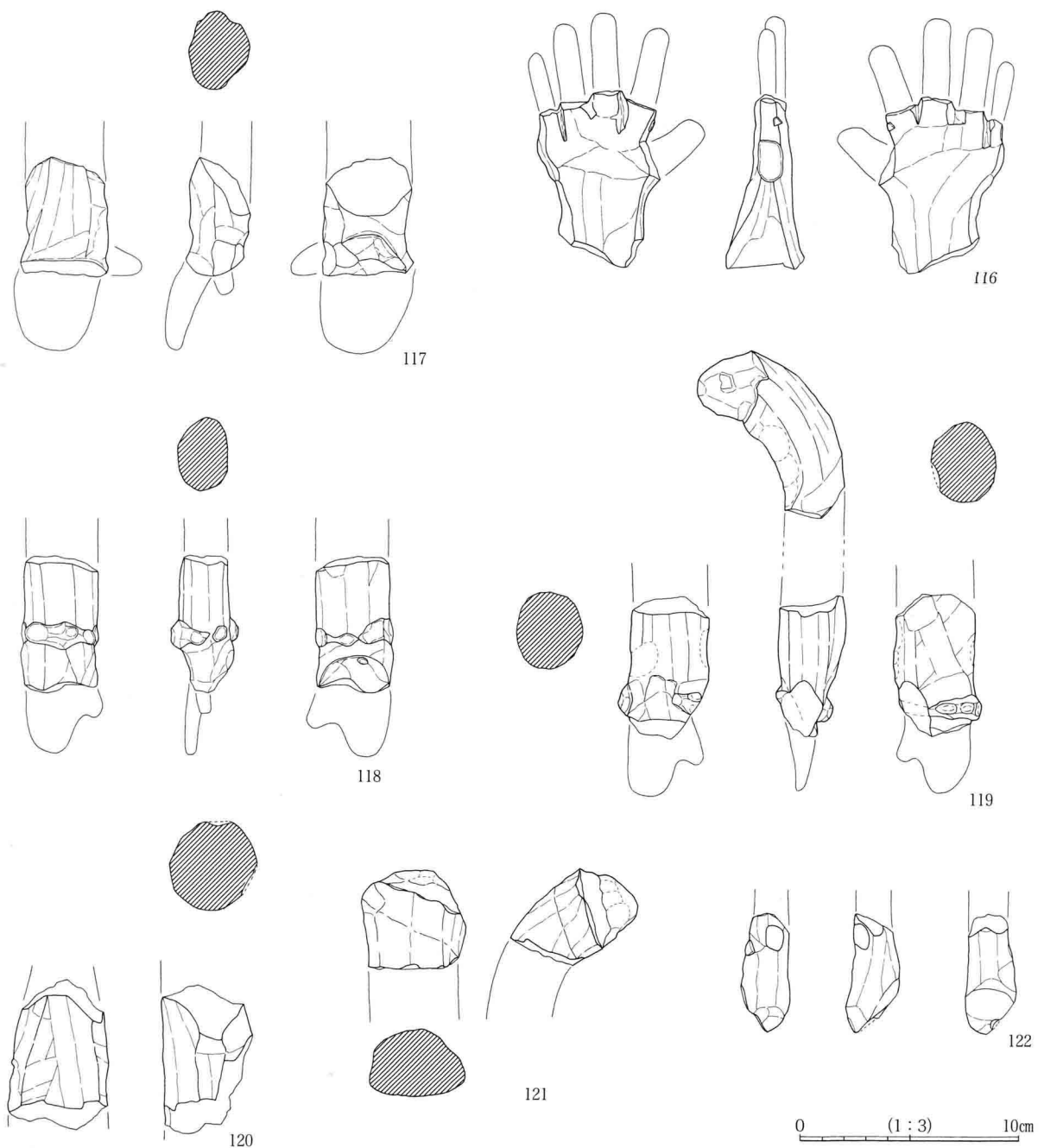
刻との前後関係は定かでない。調整は内外面ともにナデ調整である。線刻は102と同様に幅広く浅く、底面は平坦である。104は一条の緩やかな弧線が線刻された破片である。線刻は102・103と同様に幅広く浅く、底部が平坦である。調整は内外面ともにナデ調整である。胎土には雲母粒が含まれる。102～104の線刻埴輪は線刻の形状や調整・胎土等で共通する。裏面の調整も類似し直接の接合関係こそないが、同一個体となる可能性が高いと考え

られる。105は3条の斜線が平行に線刻された破片である。線刻は102～104に比べて細く浅い。胎土は5 mm大の小石を多く含み、粗い。墳裾トレンチより出土した。

突帯は10点を実測・掲載した。断面形態はM字形・台形・半円形の3種が認められる。106～111は断面M字形の突帯である。106・107は上端部が下端部より突出した形態である。線刻埴輪として前述した102も同様な形態を呈する。突帯上下面・側面ともに丁寧なナデつけで、この形態には突帯のみが剥がれ落ちた事例が少ない。106が墳端部のNトレンチ、107が墳頂部第2主体部内より出土した。胎土は両者ともに5 mm大の小石を多量に含んで粗く、107は雲母粒を含む。108～110は断面M字形であるが、中央部が深く凹む。突帯側面上下端部をそれぞれ挟み込むようにしてナデつけた結果と考えられる。胎土はいずれも2～3 mmの小石や砂粒を、110は雲母粒を含み粗いが、109は比較的良好な混和状態である。111は突帯側面に強いヨコナデを施し、断面M字形となっている。突帯上面には黒色の顔料かとも考えられる塗布痕跡が観察され、形象埴輪との関連性がうかがわれる。墳裾2区黒色土層中より出土し、墳頂部からの転落の可能性が考えられる。112～114は断面台形の突帯である。112・113は突帯側面に丁寧なナデが施されて若干凹み、断面M字形に近い様相をもつ。胎土は2 mm大の小石や砂粒を含んで粗く、112が墳裾1区、113が墳頂部のTWトレンチより出土している。114は他例に比較して、突帯幅が細く突出度が高い。突帯全面にナデが観察されるが、上面は一部砂粒の動きがみられるほど強いナデ調整が施され、水平面を作り出している。また、突帯下面はナデが複数回施され、それぞれ重なり合う調整痕跡が115と類似する。胎土は2 mm大の小石・砂粒を含むが、全般的に小石・砂粒が多い本墳出土埴輪において109とともに良好な部類に属す。墳裾1区出土。115は断面半円形の突帯である。突帯上部および下部に粘土を貼付け、ナデ調整によって半円形に整形している。類似例はほとんどなく、あるいは円筒埴輪の突帯ではない可能性も考えられる。墳頂部のTWトレンチより出土している。

形象埴輪（116～132）は人物埴輪と三環鈴・家形埴輪が出土している。いずれも細片化しており、全体像が把握できるものはない。

人物埴輪（116～126）は手・腕・脚・足・美豆良の各破片が出土している。116は右手の破片である。指はすべて欠損しているが、各指の根元の状況から一本一本表現したことが確実で、他に比べて大きいことを特徴とする。人差し指の親指側には粘土粒が貼り付いており、何かを持っていた可能性が考えられる。また、手首外側には赤彩の痕跡が残る。ただし、赤彩は手首への塗布ではなく、他部位への塗布の際に付着したものと考えられる。胎土は石英等の粒子を含み粗い。墳頂部山側（南側）より出土している。118は手首より掌までの破片である。中実成形で全面にナデ調整が施される。指はすべて欠損しているが、片側が外側に開き、この部分が親指につながるとみて右手と判断した。掌には粘土塊の付着が認められ、何かを握っていた可能性が考えられる。手首には粘土紐を貼付けたうえ所々を明瞭に丸く整形していて、手玉を表現したとみられる。胎土には石英粒・雲母粒を含んで粗く、焼成は良好、色調は赤褐色を呈する。墳頂部TWトレンチ東側より出土している。119は左腕部である。肩から肘にかけての破片と手とに分かれるが、胎土・焼成・調整ならびに大きさより同一個体と判断される。ともに中実成形で、指頭押圧による整形後、ナデ調整が施される。肩部へはソケット状の差し込みによって接合している。手首には粘土紐のうえに丸い粘土粒を貼付け、手玉を表現している。手首より先は欠損しているが、割れ口の状況からは親指のみが独立して表現されたものと考えられる。胎土には石英粒・雲母粒を含んで粗く、焼成は良好・色調は赤褐色を呈する。両破片ともに墳頂部TWトレンチ東側より出土している。なお、118と119は出土位置・胎土・焼成・色調等から同一個体である可能性が考えられる。117は手首より掌まで破片である。中実成形で全面にナデ調整が施される。指はすべて欠損しているが、掌を上向きに指先を下に向けた際の左側の割れ口を親指の欠損とみて、親指のみが独立して表現された右手と判断した。掌には剥離の痕跡が認められ、何かを



25図 形象埴輪実測図(1) (1:3)

握っていた可能性が考えられる。手首には他例に認められる手玉の表現は見られない。胎土には石英粒・雲母粒を含んで粗く、焼成は良好、色調は赤橙色を呈する。墳頂部TWトレンチ西側より出土している。121は右肩部の破片である。中実成形でナデ調整が施される。肩部との接合はソケット状の挿入部を作っている。胎土には石英粒・雲母粒を含んで粗く、焼成は良好、色調は赤橙色を呈する。墳頂部TWトレンチ西側より出土し、出土位置や特徴より、117と同一個体の可能性も考えられる。120は腕部とみられる破片である。中実成形で、片側がすばまる形態を呈する。全面ナデ調整が施されている。胎土には石英・雲母他の多量の砂粒を含んで粗く、焼成は良好、色調は赤橙色を呈する。122は左側の下美豆良かとみられる破片である。中実の円棒状で、先端部でわずかであるが前方へ屈曲する。先端部右側側面には剥離痕跡が認められ、顔部に接着していたものと考えられる。なお、



26図 形象埴輪実測図(2) (1:3)

部分的に黒色顔料の塗布痕跡かとみられる顔料痕の付着が認められ、顔部には彩色が施された可能性が考えられる。胎土は砂粒を少量含んで良好、焼成は良好で色調は暗黄色を呈する。墳頂部TWトレンチ西側より出土している。124は靴を履いた左足の破片である。中実成形で、全面にナデ調整が施される。裏面には台部に接合したとみられる剥離痕が観察され、爪先先端部のみが突出していたと想定される。胎土には石英粒・雲母粒他の砂粒・小石を多く含んで粗く、焼成は良好、色調は赤橙色を呈する。墳頂部TWトレンチ西側より出土している。125は靴を履いた右足の破片である。中実成形で、全面にナデ調整が施されるが、一部にハケ状工具痕が観察される。靴甲部には粘土粒貼付けによる突起が3カ所に認められる。裏面割れ口付近に台部接合痕がみられ、残存部の大半が台部より突出していたものとみられる。胎土には石英粒・雲母粒他砂粒・小石を多く含んで粗く、焼成は良好、色調は赤橙色を呈する。墳頂部TWトレンチ西側より出土している。126は靴を履いた左足の破片と考えられる。足部は爪先側の大半が欠損するが、中実成形で全面にナデ調整が施される。脚部は根元から欠損しているが、123同様に中空成形とみられる。脚部との接合部付近の甲には粘土粒貼付けによる突起が1カ所認められる。胎土に白色粒・小石等を含んで粗く、焼成は良好、色調は赤橙色を呈する。墳頂部TWトレンチ西側より出土している。突起状装飾の大きさにおいて相違をみせるが、胎土・焼成・色調・出土位置などで125と共通し、同一個体である可能性が考慮される。123は靴を履いた左足部の破片である。靴（足）は中実、脚は円筒形に成形され、足先からナデ調整が施されている。足部裏面には台部からの剥離痕が認められ、足先部のみが突出していたものとみられる。胎土には2mm大の小石、石英ほかの砂粒を多量に含んで粗く、焼成は良好、色調は赤橙色を呈する。墳頂部TWトレンチ西側より出土している。

三環鈴（127～129）は3点の破片が出土しており、いずれも断面不整円形で幅1.3cmの円環部に鈴を付けた部分の破片である。127のみ鈴部が残存し、他の2点は欠損している。鈴は指頭押圧によって成形された粘土を貼付けるが、切り込み等の鈴表現はみられない。円環部内径6.7cm・外径9.4cmに復元され、3点とも共通する。胎土には石英粒・雲母粒ほかの砂粒を含んでやや粗く、焼成は良好、色調は赤橙色を呈する。胎土・焼成・色調ならびに復元径等よりすべてが同一個体の可能性が考えられる。墳頂部TSトレンチより出土している。なお、この他に形状より別個体と考えられる鈴の小片が1点確認されている。

家形埴輪（130・131）は裾巡り突帯および壁の破片が認められる。130は裾巡り突帯の破片である。粘土紐を積み重ねて板状に成形し、内外面ともにナデ調整を施す。この上端部には板状粘土を水平方向に載せて接合し、壁との接続部を成形する。また、壁との接合部にはスカシ状の整形面が残り、出入口部に該当するものと考えられる。胎土は5mm大の小石を含んだ砂粒を多く含み、粗い。墳頂部TWトレンチ西側より出土している。131は壁角部の破片と考えられる。2枚の板状粘土をほぼ直角に合わせ、片側がもう一方を挟み込むようにして接合している。ナデ調整が施されるが、表面は粘土貼付けによる凹凸が残り、平滑ではない。また、部分的であるが顔料塗布の痕跡が認められる（実測図右側のトーン部）。胎土には5mm超の小石を含めて多量の砂粒を含み、粗い。墳頂部TWトレンチ西側より出土している。

不明形象埴輪（132）は部位不明により、不明形象埴輪として報告する。板状粘土による造作で、内外面ともに剥離痕は観察されない。外形は緩やかな円弧を描き、ほぼ中央部に円孔が1孔、裏面より穿たれている。調整は内外面ともにナデ調整で、特に裏面には横方向の指ナデによる圧痕が明瞭に残る。胎土は2mm大の小石・白色粒を多量に含んで粗く、焼成は良好、色調は赤橙色を呈する。墳頂部TWトレンチから出土している。

〔出土埴輪のまとめ〕

樹立埴輪の種類と位置 出土した埴輪には円筒埴輪・家形埴輪・人物埴輪が認められる。原位置を示す埴輪の出土や布掘・ピット等の埴輪設置のための付帯施設は確認されず、樹立位置の特定はできなかった。底部の破片

も含めて出土埴輪の細片化はきわめて顕著で、積石墳丘であることを考慮すると、埴輪の樹立においては特別な施設を設けることなく墳丘上に置かれた程度であったと考えられる。各破片の出土位置を確認すると、墳頂部からは円筒埴輪・家形埴輪・人物埴輪が出土し、墳裾部からは円筒埴輪が出土している。墳裾付近より出土した形象埴輪片はごく少量あるが、いずれも墳丘崩落土と想定される土層中からの出土で、家形埴輪・人物埴輪は墳頂部に限定される。よって、埴輪の配置は墳頂部に円筒埴輪・家形埴輪・人物埴輪が、墳裾部には円筒埴輪が樹立されたものと想定される。また、調査が実施された第2主体部内から少なからぬ破片が出土していることから、埴輪は古墳築造時(第1主体部)に樹立され、第2主体部造営時には追加樹立が行われなかったと考えられる。埴輪に代わり第2主体部に伴う墳丘設置遺物としては、墳頂部より出土した土器群(土師器・須恵器)が該当すると判断される。埴輪の出土量は $54 \times 34 \times 9.5$ cmのテンバコ30余箱と調査実施範囲に比して多くはなく、設置が簡易であったことによって失われた破片が多数あることを想定しても、樹立密度が密であったとは考えがたい。

円筒埴輪 円筒埴輪には全体形を把握できる資料はなく、器高および段構成について知ることはできない。そこで、破片資料にみられる各部の形態を提示することで円筒埴輪に関するまとめにかえたい。口縁部は大きく外反せず、緩やかに外側に開きながらも直立する形態となる。口縁端部はナデ調整によって明確な面をなす断面方形の形態と丸く収める形態の二種類が存在する。底部は自重によって内側に歪んだものはあるが、基本的に直線的で、外側に開く形態とはならない。底部復元径は30cm前後が普通とみられ、38cm程の大型品も認められる。底部の成形は積み上げた粘土帯の間隔が上部の破片と異なることから、基部が成形されたものと考えられる。底部接合痕は少なくとも1カ所確認することができる。突帯は断面M字形が主体をなし、断面台形のものも含まれる。ただし、断面台形の突帯も突帯側面を強くヨコナデすることによって凹面が生じ、M字形に近い形態となっている。台形から中央部が大きく凹むM字形への変化は漸移的である。スカシ孔は円形のみが確認される。突帯直上に位置することが確認できるが、穿孔される段や段内における配置については不明である。調整はハケ調整が少量みられる程度で、ナデ調整が優勢で主体を占める。この調整の異なる両者を比較すると、器壁の厚さにおいてハケ調整のものの方がより薄い傾向を看取することができる。顔料塗布には赤色塗彩が認められ、器壁外面ならびに突帯への塗布が確認できる。胎土は基本的に2mm大の小石・白色粒を多量に含んで粗い。焼成に関しては黒斑を有する破片はなく、すべて窖窯焼成と考えられる。

形象埴輪 形象埴輪には人物埴輪ならびに家形埴輪が確認できるが、円筒埴輪同様に細片化が著しく、全体像を把握できるものはない。特に台部は円筒埴輪との識別が難しく、101のような大型品が形象埴輪の台部になると想定もできるが、明確に形象埴輪の台部を抽出してはいない。人物埴輪には五指を独立して表現した手をもつ人物・親指のみを独立して表現し、手玉を装着する人物・靴を履く双脚表現の人物の存在が確実に把握できる。五指を独立して表現した手は他に比べて手の込んだ造作であるとともに大きい。後述する双脚表現の人物埴輪との個体同定は難しいが、大型品として本墳形象埴輪群の中心をなす人物を表現した可能性が想起される。また、大きさという観点からは三鈴環がこの人物に関係する可能性が考えられる。三環鈴は馬形埴輪に付された事例が多くみられるが、本墳より出土した埴輪片中に馬形埴輪と判断できる破片がみられないことから、大きさからみるとこの最も大きな人物埴輪に伴うと考えられよう。さらに1点確認された鈴の破片は、三環鈴がもうひとつ存在する可能性を示すともに人物埴輪の足結の先端部に取り付けられた装飾ともみられ、五指を独立表現する人物が双脚表現であるとも考えることもできる。親指のみが独立表現される手は右手2・左手1があり、手首に手玉の表現があるものとなないものに分けられ、少なくとも2体存在することが確実である。掌には剥離痕や粘土粒の付着がみられることから何かを握っていた姿態が想定され、女子像である可能性が考えられる。靴を履く双脚表現の人物埴輪は突起状装飾のあるものとなないものがみられ、それぞれ左右一対になるとした場合、少なくとも2体

の存在が確認できる。人物埴輪において靴を履いて双脚・立位表現されるのは、「武人埴輪」とされる男子像に限られ、本例もそれに該当すると考えられる。すると、下美豆良片とした122はこれらの男子像に伴う可能性が高いと考えられる。また、前記した鈴の破片は、これら双脚表現の人物埴輪の足結の先端に付けられた可能性も考慮される。さて、靴は突起状装飾の有無に関わらず、分厚く表現され、人物埴輪の共通表現を分析した日高慎による分類（日高 1996）のd類に該当する。d類は埼玉・千葉・群馬に分布がみられる。台部は前記したように資料の抽出・特定ができていないが、靴の接合状況より日高分類のa類に該当すると想定される。この台部a類は茨城・群馬に多くみられ、双脚表現の台部としては普遍的な形態とされている。この靴d類・台部a類という分類の組み合わせからは隣接地域である群馬県域との関係性が浮かびあがる。足結の先端部に鈴が付けられる表現も群馬県域に多く、人物埴輪の樹立が卓越しない当地において、埴輪の系譜や生産を考えるうえで示唆的な情報となろう。家形埴輪は報告した壁と裾巡り突帯の破片の他に屋根の補強粘土などが確認できるが、明確に部位を特定できる破片は見いだせなかった。胎土は報告した2片ともに類似し、あるいは同一個体である可能性が考えられるが、いずれにせよ、家形埴輪の破片は多くなく、樹立された棟数も1～2棟と少数であったと考えられる。焼成は形象埴輪片にも円筒埴輪同様に黒斑はみられず、すべて窖窯焼成と考えられる。

以上のように、形象埴輪は家形埴輪1棟程度と人物埴輪5体以上（男子像2体以上、女子像2体以上、五指が独立表現された大型の人物1体）が墳頂部に配置されたものと考えられる。

埴輪の樹立時期 西前山古墳に樹立された埴輪は、円筒埴輪の形態、特に突帯の突出度や人物埴輪における五指の独立表現等で第2主体部副葬品と報告された遺物や土器群と共伴する時期の特徴とは考えがたく、より古い时期的特徴として西前山古墳の築造時期が遡る可能性を示唆している。出土状況からも第2主体部造営時に埴輪の樹立は行われず、それに先立つ古墳造営時に樹立された可能性が高いと想定され、古墳築造時にのみ樹立された一括資料であると捉えてよいと考える。まず、焼成が窖窯焼成であることより川西宏幸による円筒埴輪編年（川西 1978）のⅣ期以降に該当することに異論はなかろう。さらに、現在のところ、善光寺平の埴輪樹立古墳で最も新しい段階のひとつと想定されている長野市腰村1号墳出土の埴輪と比較すると、本墳出土品の方が突帯の突出度が高く、形態的にも古相を呈する。腰村1号墳は低い突帯・二次調整を省略したハケ調整・基部調整を欠く等の諸特徴より、6世紀前半代の時期が想定されており（岩崎 1982）、これを本墳築造の下限と捉えることができる。円筒埴輪における各部の特徴より最も類似した事例を求めると、本墳とは指呼の距離に位置する長礼山2号墳出土埴輪が挙げられる。ハケ調整が主体となる点で本墳出土埴輪と大きく異なるが、口縁部や底部の形態・突帯の形状等、形態的特徴はきわめて良く類似する。長礼山2号墳からは、円筒埴輪・朝顔形埴輪・家形埴輪・盾形埴輪・人物や動物形・鳥形の土製品が出土し、5世紀後半代に位置づけられている（矢口 1982）。また、八丁鎧塚2号墳出土埴輪（小林ほか 2000）にも類似する形態的特徴をみることができる。円筒埴輪の各部の形態は類似し、長礼山2号墳とともに大きくは同時期として把握することができる。また、八丁鎧塚2号墳では「武人」等の人物埴輪片が出土しており、双脚表現も靴の出土により確認できる。靴は側面に刺突と線刻による文様が表現される。また、脚部との接合方法において八丁鎧塚2号墳では円筒状の脚部に側面より足部が接合するのに対し、西前山古墳では円筒状の脚部が足部の上に載るという点で異なる。どちらがより古い形態かここで明らかにすることはできないが、文様による靴の表現や円筒埴輪に主体をなさないものの細く高くシャープに処理された突帯を持つ資料がすくなく含まれることから、八丁鎧塚2号墳が先行する可能性を考えておきたい。このように捉えられるならば、西前山古墳の埴輪は5世紀後半を中心とした時期に製作された可能性が考えられる。すると、第2主体部の築造までにおよそ100年もの空白期間を考慮しなくてはならない。第1主体部に関する情報がきわめて少ない中、この問題解決の糸口をどこに求めるか、突きつけられた課題のハードルは高い。さらに、

数少ない人物埴輪樹立古墳として八丁鎧塚2号墳ともに積石墳丘で共通する点も見逃せない。一般的な盛土墳丘の古墳とは異なる性格が付与されることが多い積石墳丘の古墳において、人物埴輪の導入という埴輪樹立の新たな形態が他に先んじて導入され、さらに継続しているとみられることは、積石墳丘の性格を単に盛土墳丘との対比のみでは描き出すことができないことを明確に示していよう。ナデ調整埴輪の系譜と展開の把握という追求課題も含めて、多くの問題が提起されていることを確認し、埴輪に関するまとめとしたい。【風間】

【引用・参考文献】

- 岩崎卓也 1982 「腰村1号古墳」『長野県史』考古資料編 全一卷(二) 主要遺跡(北東信) 長野県史刊行会
 川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号
 小林宇彦ほか 2000 『長野県史跡 八丁鎧塚』須坂市教育委員会
 日高 慎 1996 「人物埴輪表現の地域性—双脚人物像の脚部の検討—」『考古学雑誌』(西野元先生退官記念論文集)
 矢口忠良 1982 「長礼山2号古墳」『長野県史』考古資料編 全一卷(二) 主要遺跡(北東信) 長野県史刊行会
 矢口忠良ほか 1981 「長礼山古墳群—第2号墳緊急発掘調査報告—」『湯谷古墳群 長礼山古墳群 駒沢新町遺跡』(長野市の埋蔵文化財第10集) 長野市教育委員会 長野市遺跡調査会

6 その他の遺物 (図133~144)

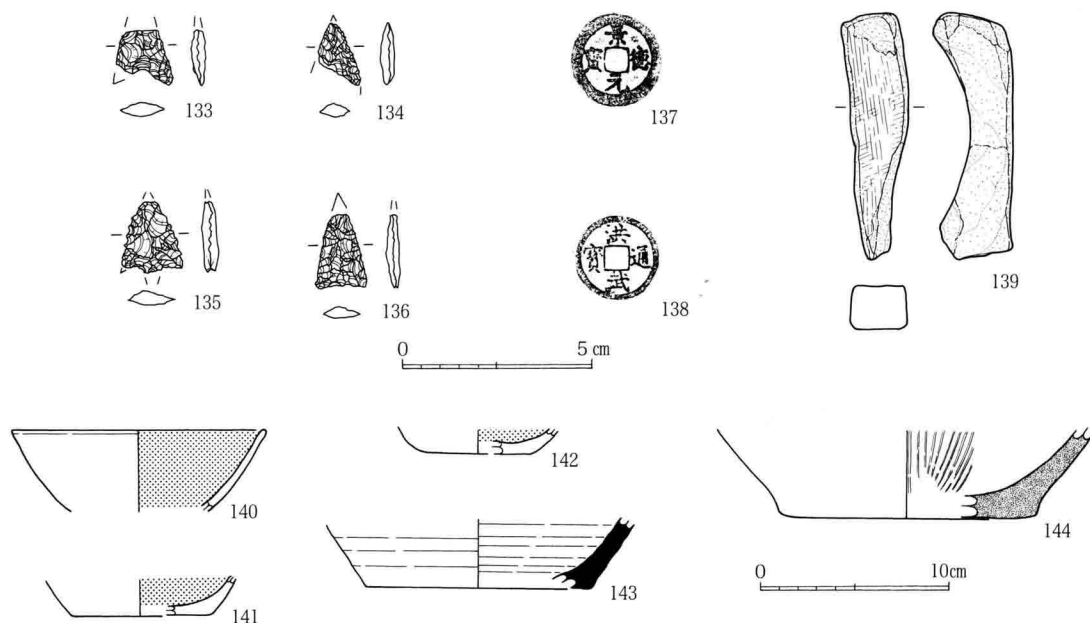
縄文時代の打製石鏃が4点出土している。出土地は共に墳裾調査区であるが、土器等の出土はみられない。

133・134は黒曜石製、135・136がチャート製である。

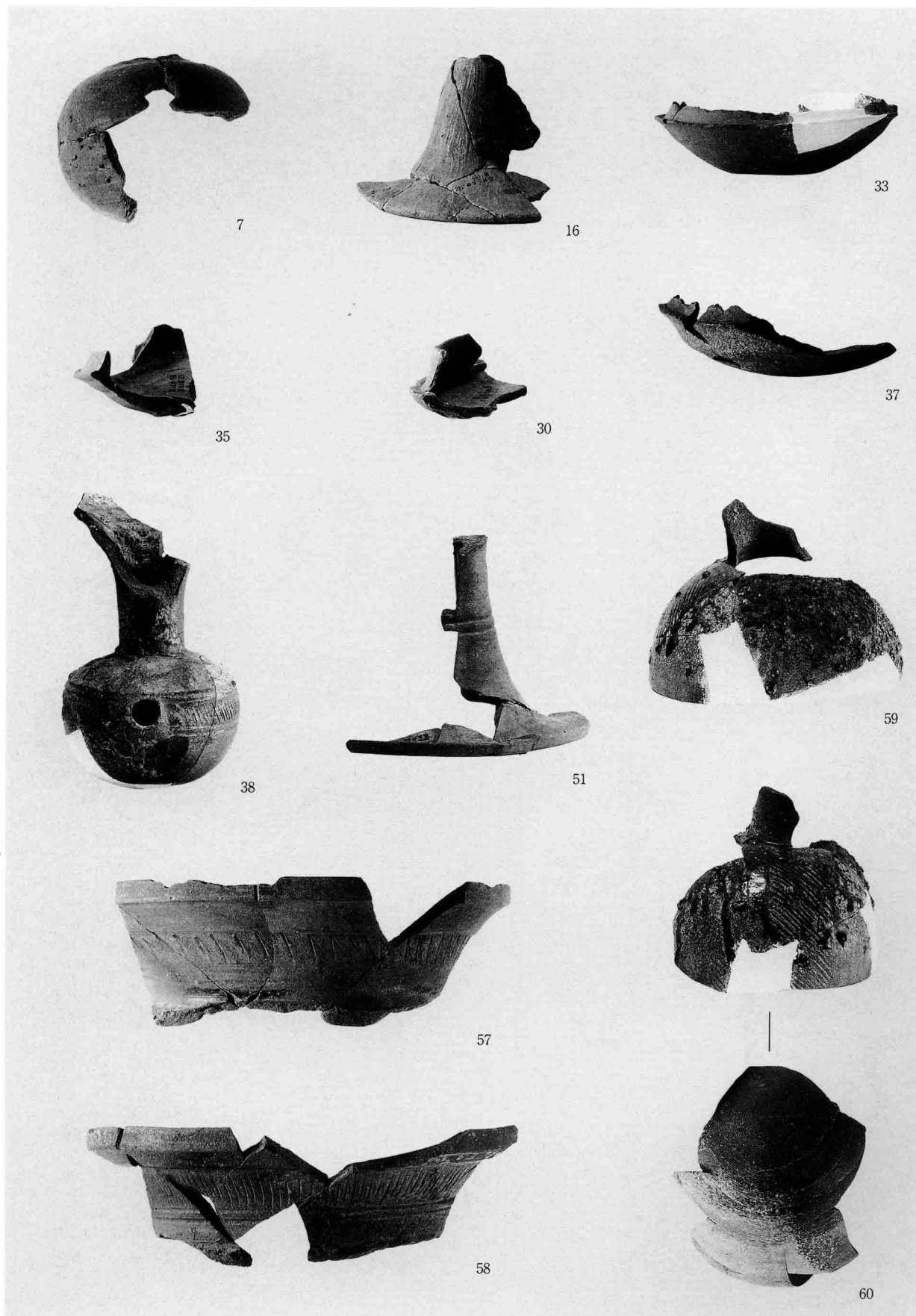
平安時代の遺物には黒色土器坏(140~142)・須恵器壺(143)・流紋岩製砥石(139)等が出土している。142の坏は底部に糸切り痕を残すが、141は回転ヘラケズリ調整である。共に内面はヘラキガキが施され黒色処理される。出土地は墳裾および墳頂からの表採品である。[法量等] 140:口径13.6cm・遺存1/7、141:底径7.4cm・遺存1/4、142:底径5.8cm・遺存1/2、143:底径12.0cm・遺存1/6

中世の遺物は墳頂から五輪塔の一部が採集されている他に、墳裾の調査で珠洲播鉢片(144)・北宋銭2枚(137・138)を得ている。[法量等] 144:底径13.6cm・遺存1/5、137:景德元寶・1004年初鑄、138:洪武通寶・1368年初鑄

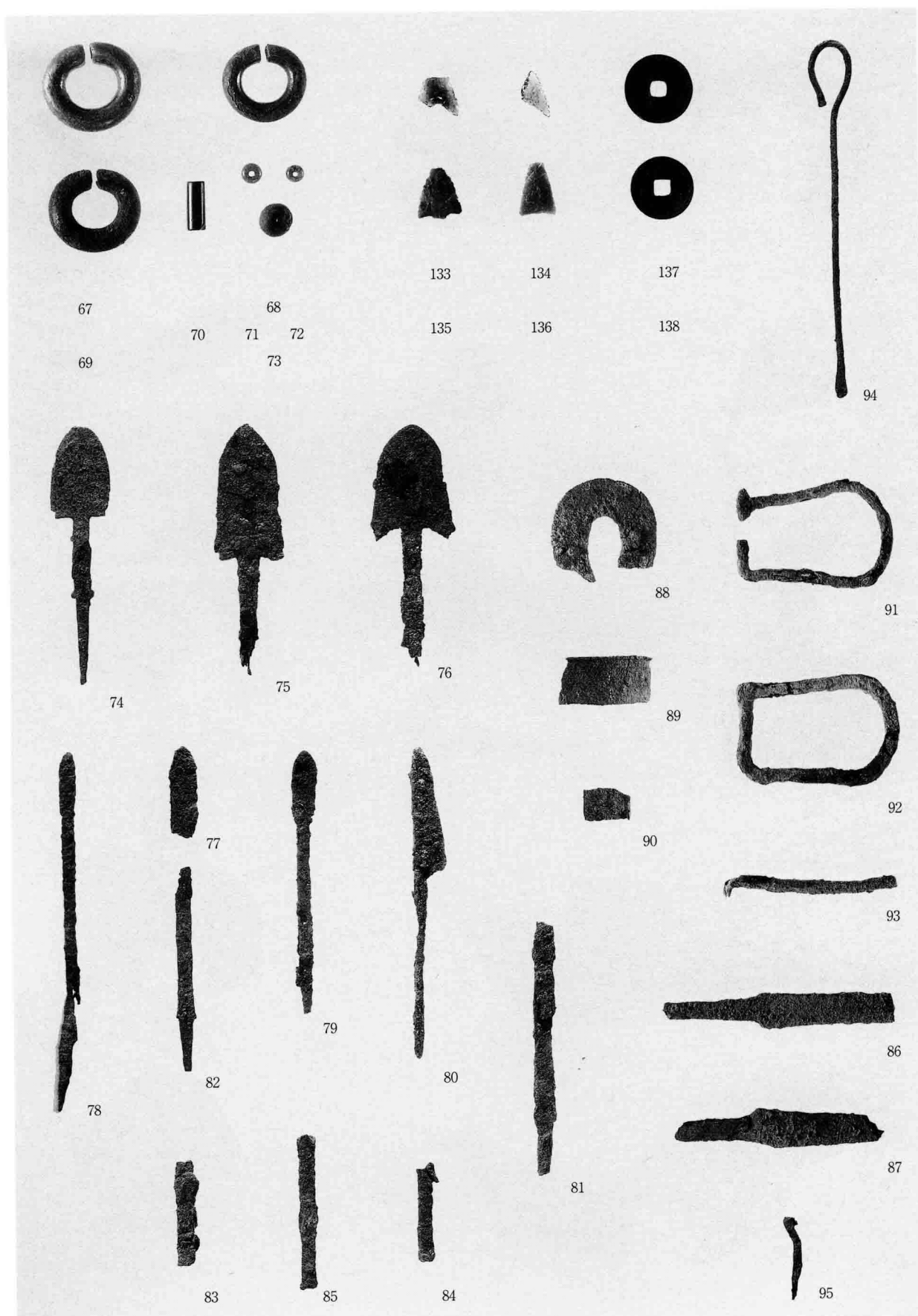
【矢口】



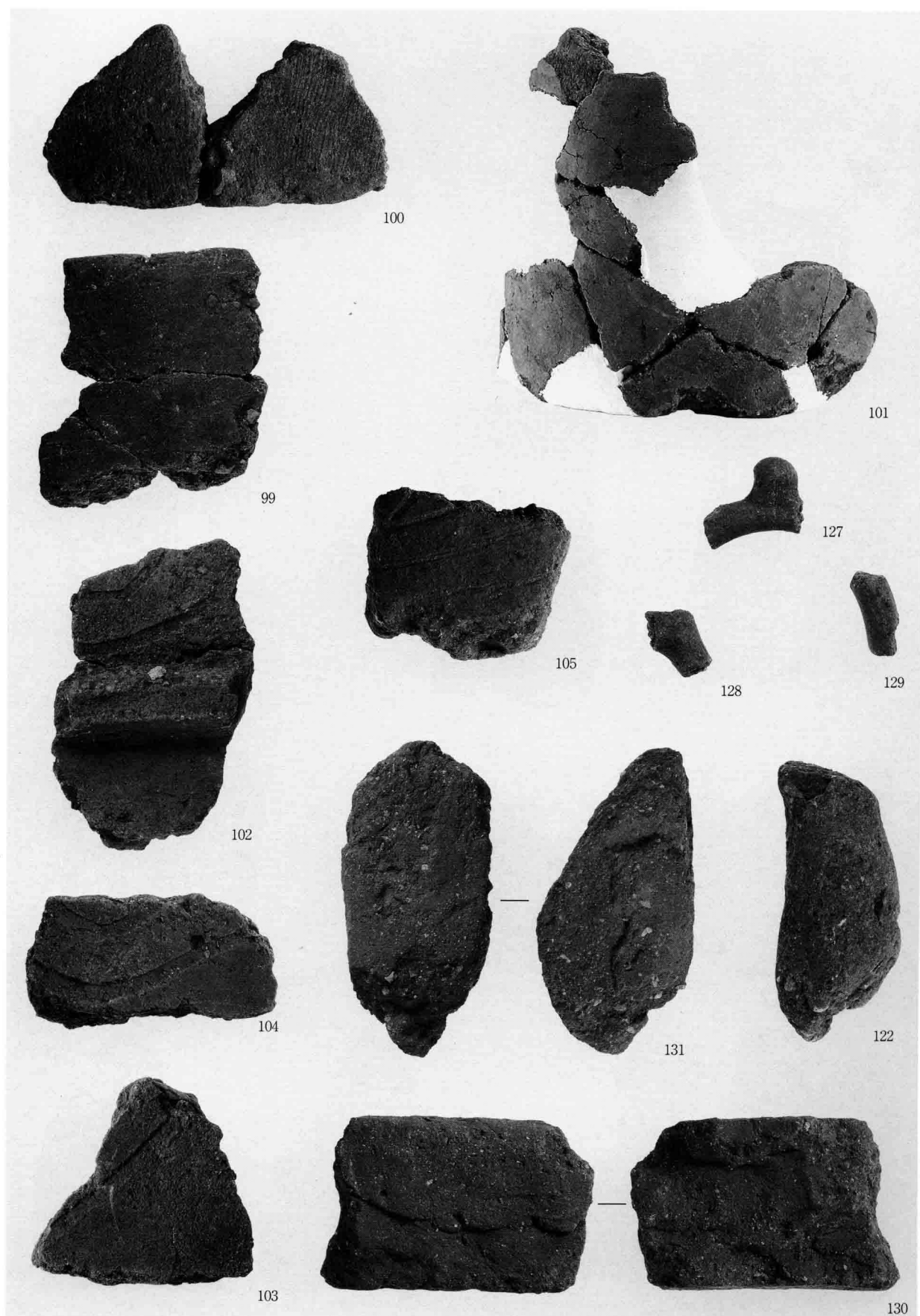
27図 その他の遺物実測図 (133~138は1:2、139は1:3、140~144は1:4)



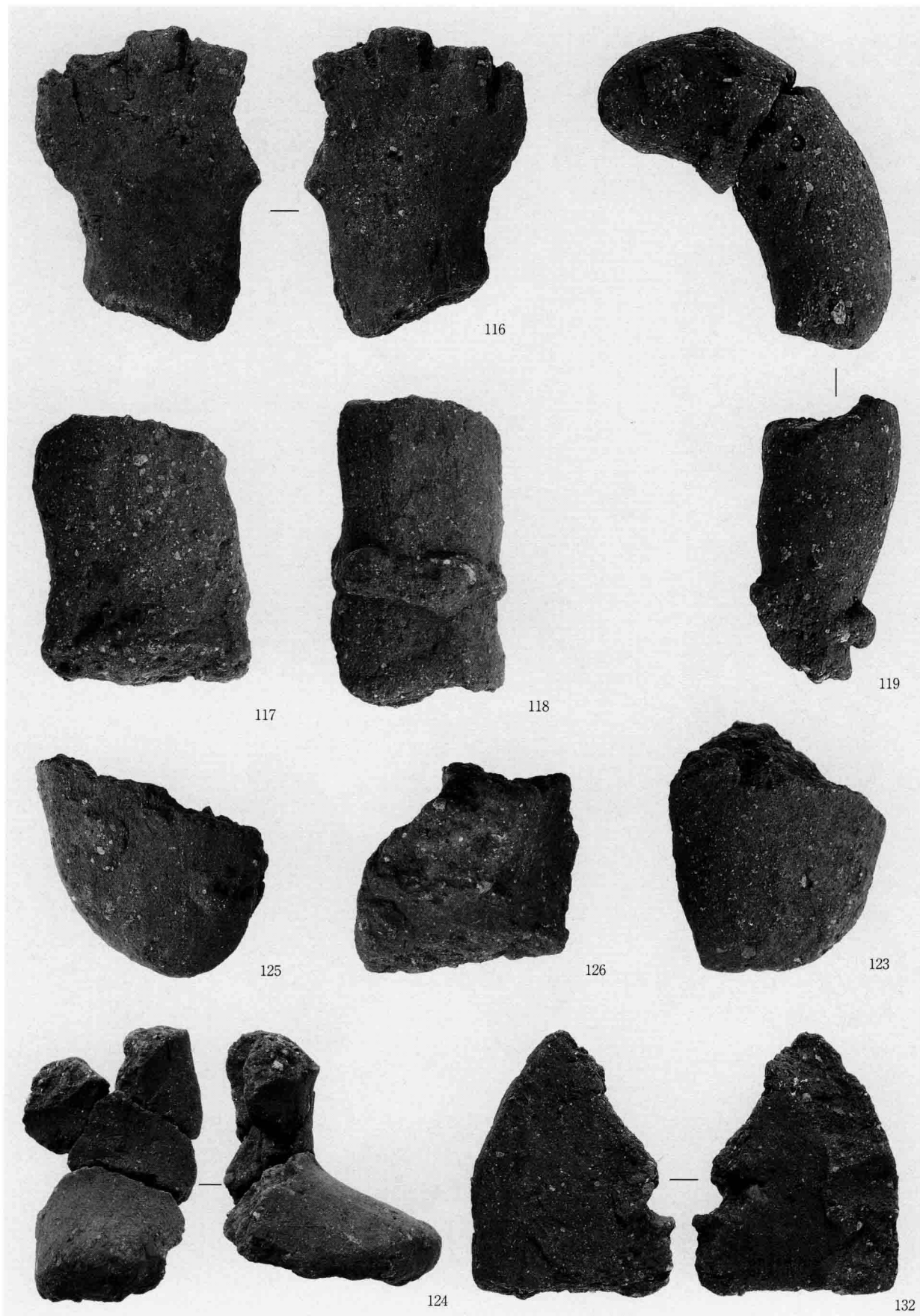
土師器・須恵器



金属・石・土製品



円筒・形象埴輪



形象埴輪

第Ⅶ章 ま と め

今回の発掘調査の目的は、藤沢川改修事業により破壊を受ける墳裾部の調査と墳頂部の破壊状況確認にあった。北側斜面の墳裾部においては外周石列が墳丘改変により破壊を受けたのか確認されない。もともと存在しなかったのか、代わりに石列を省略し大石を根石として据えることにより墳裾部を確定しているようである。この大石がある位置は墳裾部形成のために地山を削り取り成形されている所でもあることに注意する必要がある。山側（南側）の墳裾部は周溝状の浅い溝により古墳の領域を決している。墳裾部の確定後、礫混じりの土石で盛土して墳形を整え、積石することにより墳丘を構築している。

墳頂部は民有地であるので、開発事業による破壊がおよばないことから主体部の石室を確認した段階で掘削をやめ、記録を作成して発掘調査を終了した。そのため1号主体部の構造・規模・床面の状況および石室内に残る副葬品の確認等将来への課題を残した。2号主体部についても同様で、特に1号主体部との関係など本古墳の性格を知る上で肝心な部分を先送りしてしまった。ちなみに、2号主体部の構築時に1号主体部は改変を受けた可能性が高く、副葬品はいまだに内在しているものと考えられる。今回の調査で得た表面採集品や出土した遺物の多くは2号主体部およびこれに関与するものと考えられる。こうした推論から埴輪の所産時期に注目し、墳丘および1号主体部は6世紀前後に構築されたものと推定される。2号主体部は既存の墳形を利用して後に積石内に追造されたもので、土器類や鉄鏃等の鉄製品・装飾品類の副葬品から構築年代を6世紀後半以降末葉にかけての構築と考えられる。

比較的多くの埴輪片が出土しているが、樹立位置等を示す痕跡は認められない。おそらく出土地点等から円筒埴輪は墳頂端部および中腹の積石内に、形象埴輪は主体部付近にそれぞれ据え置かれていたものと推定される。そして1号主体部に関与する葬送儀礼時の所産と考えている。

墳頂部の保護措置として、掘削したトレンチをまず土嚢によって石材を固定し、保護シートで被覆し、搬出した石材を用いて埋め戻した。更に墳頂平坦部全体に崩落石材を覆い積石塚の外観を保持した。墳裾部は擁壁工事工法の変更により、崩落石材を擁壁に埋め込むことにより積石塚古墳のイメージをつくりだしている。

発掘調査によって得られたデータは以下のとおりである。

墳形：円墳（楕円形）、**墳径：**南北20.5m・東西22.5m、**墳丘高：**現状5m、**墳丘外観：**積石塚、**墳丘構造：**土石混合盛土＋表面積石、**出土遺物：**土師器、須恵器、円筒（多）・形象埴輪、鉄鏃3点、鉄釘1点

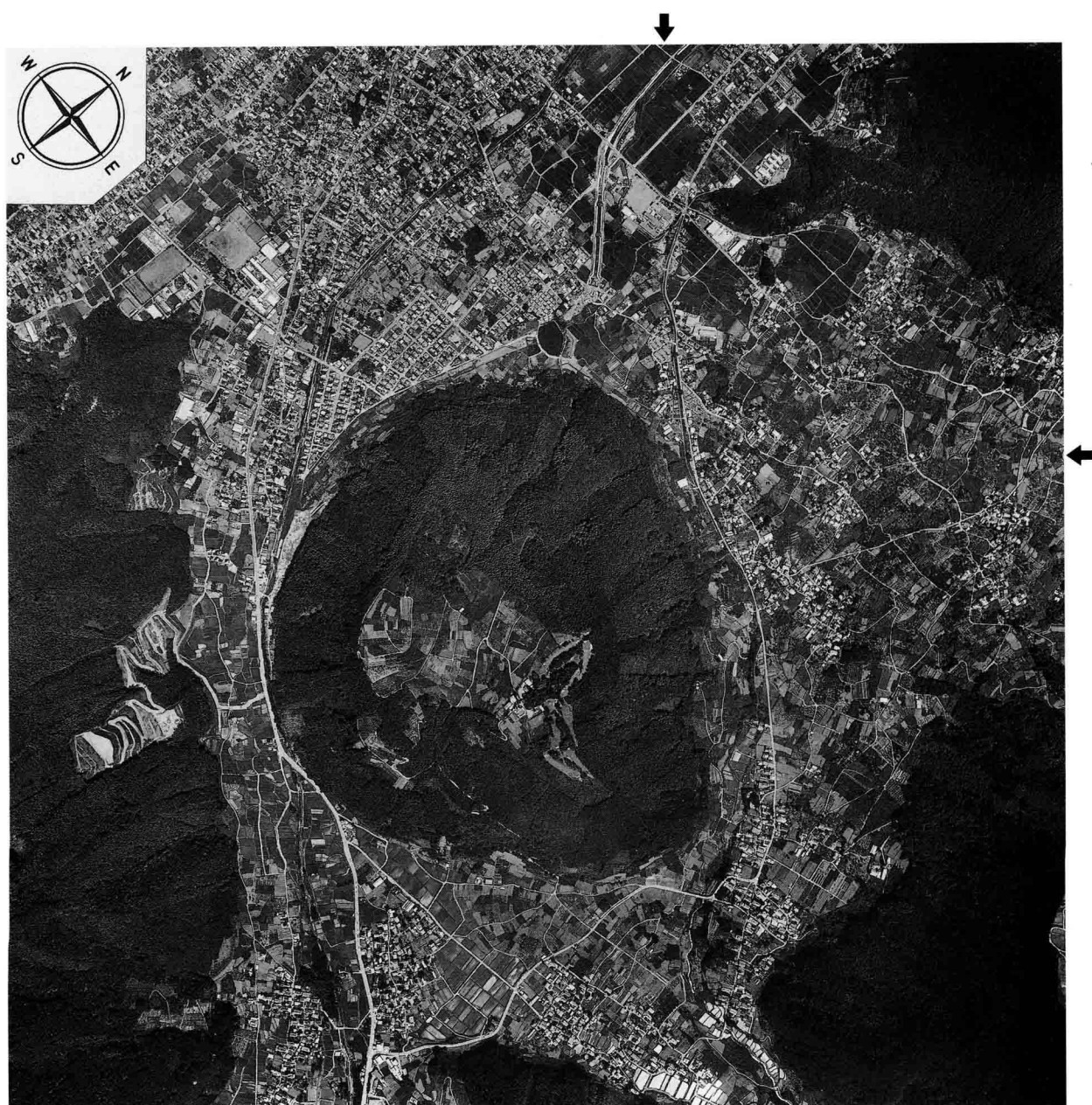
1号主体部：横穴式石室または箱形石室、石室幅：1.05m、トレンチ内現長：5.80m、出土遺物（TEトレンチ）：土師器、須恵器、鉄鏃、不明鉄製品

2号主体部：箱形状石室、規模：不明（ほぼ全壊）、床面：拳大角礫、出土遺物：土師器、須恵器、鉄鏃、刀子、鏹、鉸具、不明鉄製品、耳環、白玉、管玉、土玉

西前山古墳は6世紀前後に構築され、その後6世紀後半から末葉頃に2号主体部が原墳丘を利用して追造されたことが明らかになってきた。築造時期を考える上で重要なポイントなる周辺の古墳との関係について考えたい。まず、東条古墳群からみてみよう。菅間王塚古墳は研究組上に耐え得る資料が少ないのだが、石塊のみの完全な積石塚で、主体部は合掌形を呈する竪穴系横口式石室といわれており、6世紀初頭から前半の築造年代が考えられている。この古墳の墳頂部にも割石積み竪穴式石室が追造されており興味深い。竹原笹塚古墳は横穴式石室と認識できる合掌形石室を有しており、伝出土資料の馬具等から6世紀中葉の所産と考えられている。この古墳か

ら100m程東側の緩斜面には円筒埴輪を出土する積石塚が存在し、ウマゴウロ古墳と呼ばれている。規模・主体部等は不明であるが、6世紀前半の築造と考えられる。この他に『松代町史』等によるとこの他にも多数の積石塚古墳が存在したというが、現状ではヤックラ状の古墳が数基残存しているにすぎない。また、隣接する桑根井古墳群の中にも6世紀中葉と考えられる直径17mの規模の積石塚で、合掌形天井横穴式石室を有する桑根井空塚の存在も注目される。ことほどさように、西前山古墳を含む東条古墳群等は、6世紀前半から中葉にかけて大型の積石塚古墳の集中地であり、合掌型石室や箱形の石室を主体部とする特異な古墳構築文化が認められる地域空間である。

【飯島・矢口】



Ⅶ－1 西前山古墳周辺航空写真（1992(平成2)年6月18日(株)ジャステック撮影)

報 告 書 抄 録

ふりがな	にしまえやまこふん						
書名	西前山古墳						
ふりがな	こくほちゅうしょうかせん（ふじさわがわ）かいしゅうじぎょうちてん						
副書名	国補中小河川（藤沢川）改修事業地点						
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財						
シリーズ番号	第90集						
編著者名	矢口忠良・飯島哲也・風間栄一・小野由美子						
編集機関	長野市教育委員会 長野市埋蔵文化財センター						
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地 TEL 026-284-0004 FAX 026-284-0106						
発行年月日	1998（平成10）年3月31日						
印刷業者	ほおずき書籍株式会社						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		座標（第Ⅷ系）	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	X=61757.0m Y=-24861.0m			
		20201	F-123	経緯度			
				北緯 36°33'23" 東経138°13'20"			
にしまえやまこふん 西前山古墳	ながのけんながのしまつしろまち 長野県長野市松代町 ひがしじょうあだにしまえやま 東条字西前山 2323番地	20201	F-123		19970917 ＼ 19971212	500m ²	河川改修
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
西前山古墳	古墳	古墳時代後期	積石塚古墳 1基 横穴式石室 1基 石室状遺構 1基		土器 須恵器 土師器 埴輪 円筒埴輪 形象埴輪 鉄製品 馬具 武器 耳環 玉類		新発見の 積石塚古墳

長野市の埋蔵文化財

1968年	第1集	『信濃長原古墳群』	1993年	第49集	『浅川扇状地遺跡群 三輪遺跡(4)』
1976年	第2集	『浅川西条』	第50集	『浅川扇状地遺跡群 本村東沖遺跡』	
1978年	第3集	『中村遺跡』	第51集	『松原遺跡Ⅱ』	
	第4集	『塩崎遺跡群』	第52集	『田牧居帰遺跡』	
1979年	第5集	『塩崎遺跡群(2)』	第53集	『岩崎遺跡』	
1980年	第6集	『三輪遺跡 一付水内坐一元神社遺跡』	第54集	『古町遺跡 流人塚』	
	第7集	『田中沖遺跡』	第55集	『浅川扇状地遺跡群 駒沢新町遺跡Ⅱ』	
	第8集	『篠ノ井遺跡群』	第56集	『上見林遺跡』	
	第9集	『四ツ屋遺跡 (第1～3次)・徳間遺跡・塩崎遺跡群(3)』	第57集	『石川条里遺跡(7)』	
1981年	第10集	『湯谷古墳群・長礼山古墳群・駒沢新町遺跡』	第58集	『松原遺跡Ⅲ』	
	第11集	『箱清水遺跡・大峰遺跡・大清水遺跡』	第59集	『史跡 松代藩主真田家墓所』	
1982年	第12集	『浅川扇状地遺跡群 一牟礼バイパスA・E地点』	1994年	第60集	『猪平遺跡・宮ノ下遺跡』
1983年	第13集	『浅川扇状地遺跡群 迎田遺跡・川田条里的遺構・石川条里的遺構』	第61集	『栗田城跡(2)』	
	第14集	『石川条里的遺構(2)・上駒沢遺跡』	第62集	『浅川扇状地遺跡群 三輪遺跡(5)・小島柳原遺跡群 上中島遺跡』	
	第15集	『箱清水遺跡(2)』	第63集	『松原遺跡Ⅳ』	
1985年	第16集	『石川条里的遺構(3)・(付上駒沢遺跡)』	第64集	『小島柳原遺跡群 宮西遺跡』	
1986年	第17集	『浅川扇状地遺跡群 一牟礼バイパスB・C・D地点』	第65集	『浅川扇状地遺跡群 牟礼バイパスB地点遺跡(2)』	
	第18集	『塩崎遺跡群Ⅳ 市道松節一小田井神社地点遺跡』	第66集	『石川条里遺跡(8)』	
1987年	第19集	『土口将軍塚古墳 一重要遺跡確認緊急調査一』	1995年	第67集	『浅川扇状地遺跡群 本村東沖遺跡Ⅱ』
	第20集	『三輪遺跡(2)』	第68集	『栗田城跡(3)』	
	第21集	『芹田小学校遺跡』	第69集	『浅川扇状地遺跡群 徳間本堂原遺跡』	
	第22集	『長野吉田高校グラウンド遺跡』	第70集	『八幡田沖遺跡』	
1988年	第23集	『横田遺跡群 富士宮遺跡』	第71集	『浅川扇状地遺跡群 ニツ宮遺跡(2)・吉田町東遺跡』	
	第24集	『塩崎遺跡群Ⅴ 殿屋敷遺跡』	第72集	『塩崎遺跡群(8)・石川条里遺跡(9)』	
	第25集	『小島柳原遺跡群 南川向遺跡』	第73集	『松代城跡』	
	第26集	『東番場遺跡』	第74集	『松代城跡Ⅱ』	
	第27集	『小柴見城跡』	1996年	第75集	『浅川扇状地遺跡群 吉田四ツ屋遺跡・三輪遺跡(6)・藁河原遺跡』
	第28集	『宮崎遺跡』	第76集	『浅川扇状地遺跡群 駒沢城跡・小島柳原遺跡群 中俣遺跡Ⅲ』	
	第29集	『浅川扇状地遺跡群 浅川端遺跡』	第77集	『浅川扇状地遺跡群 松ノ木田遺跡』	
	第30集	『地附山古墳群』	第78集	『布施塚1号古墳・2号古墳』	
	第31集	『町川田遺跡』	1997年	第79集	『柏尾南遺跡』
1989年	第32集	『中条遺跡』	第80集	『小島・柳原遺跡群 水内坐一元神社遺跡Ⅱ』	
	第33集	『鶴前遺跡』	第81集	『裾花川扇状地遺跡群 若宮南遺跡』	
	第34集	『石川条里遺跡(4)』	第82集	『浅川扇状地遺跡群 松ノ木田遺跡Ⅱ』	
	第35集	『篠ノ井遺跡群Ⅱ』	第83集	『下箕ヶ谷遺跡』	
1990年	第36集	『屋地遺跡Ⅱ』	第84集	『浅川扇状地遺跡群 吉田古屋敷遺跡』	
	第37集	『篠ノ井遺跡群Ⅲ』	第85集	『上九反遺跡』	
1991年	第38集	『栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡(3)』	第86集	『裾花川扇状地遺跡群 寺村遺跡』	
	第39集	『塩崎遺跡群(6)・石川条里遺跡(5)』	1998年	第87集	『長野遺跡群 西町遺跡』
	第40集	『松原遺跡』	第88集	『小島柳原遺跡群 水内坐一元神社遺跡Ⅲ』	
	第41集	『小島柳原遺跡群 中俣遺跡・浅川扇状地遺跡群 押鐘遺跡・檀田遺跡』	第89集	『裾花川扇状地遺跡群 尾張城跡』	
1992年	第42集	『田中沖遺跡Ⅱ』			
	第43集	『南宮遺跡』			
	第44集	『塩崎遺跡群(7)』			
	第45集	『石川条里遺跡(6)』			
	第46集	『篠ノ井遺跡群(4)』			
	第47集	『浅川扇状地遺跡群 ニツ宮遺跡・本堀遺跡・柳田遺跡・稲添遺跡』(2分冊)			
	第48集	『小島柳原遺跡群 中俣遺跡Ⅱ』			

長野市の埋蔵文化財第90集

西 前 山 古 墳

平成10年3月24日 印刷

平成10年3月31日 発行

編 集 長 野 市 教 育 委 員 会
 発 行 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー
 印 刷 ほ お ず き 書 籍 株 式 会 社